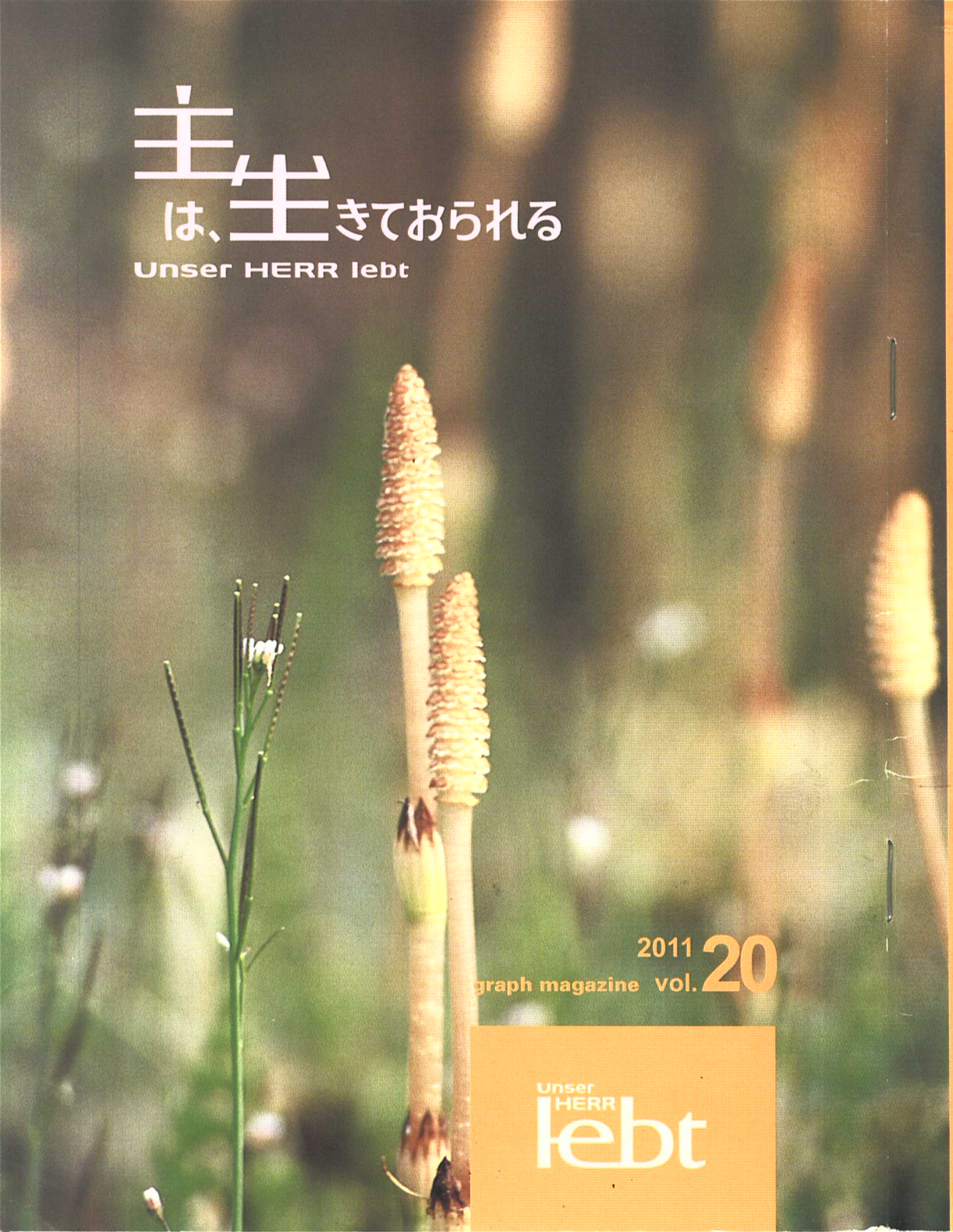
主は、生きておられる

Unser HERR lebt



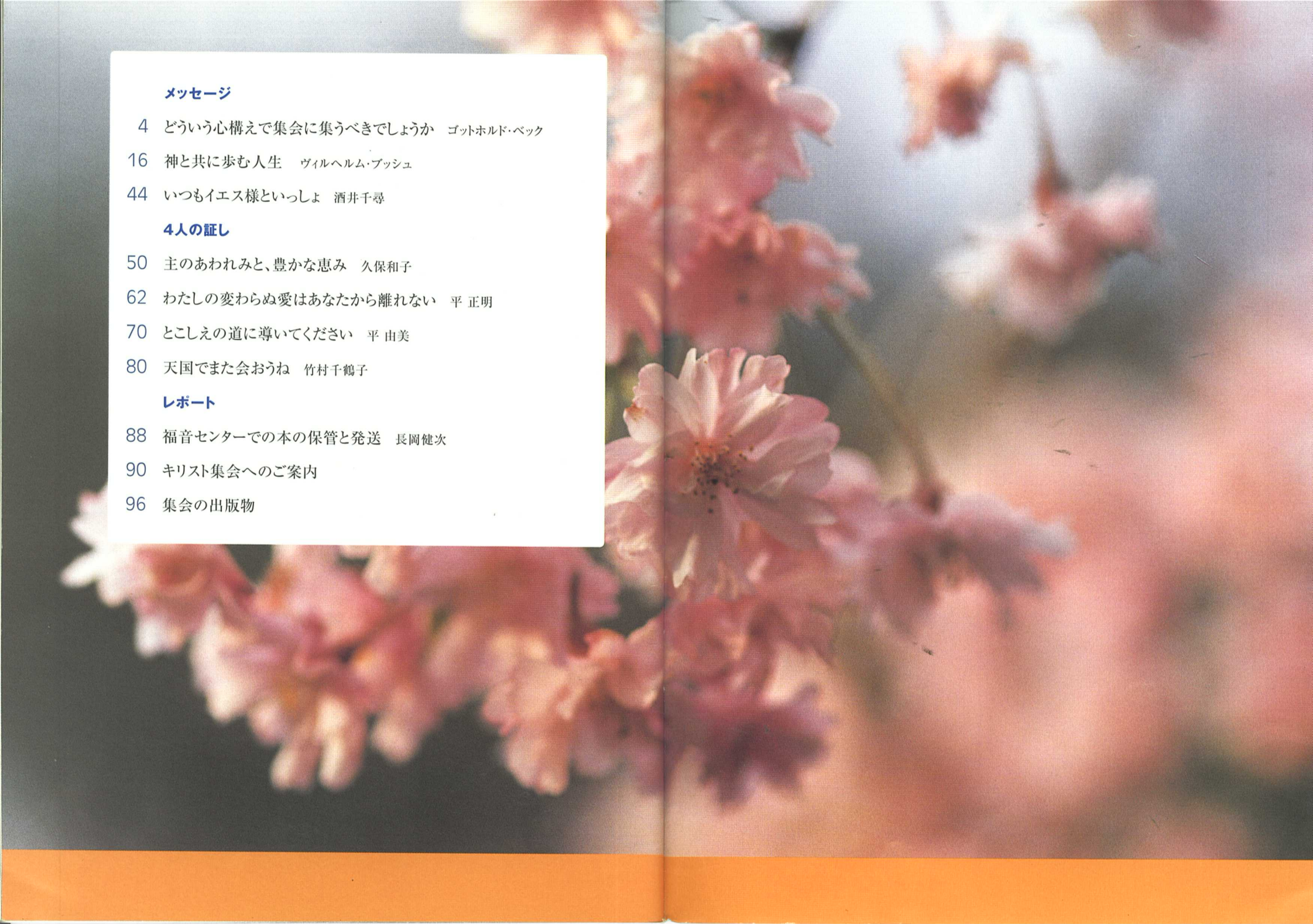
2011 graph magazine vol.20

Unser HERR lebt

Unser HERR lebt
主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

vol.20 定価100円（本体95円）



メッセージ

4 どういう心構えで集会に集うべきでしょうか　ゴットホルド・ベック

16 神と共に歩む人生　ヴィルヘルム・ブッシュ

44 いつもイエス様といっしょ　酒井千尋

4人の証し

50 主のあわれみと、豊かな恵み　久保和子

62 わたしの変わらぬ愛はあなたから離れない　平 正明

70 とこしえの道に導いてください　平 由美

80 天国でまた会おうね　竹村千鶴子

レポート

88 福音センターでの本の保管と発送　長岡健次

90 キリスト集会へのご案内

96 集会の出版物



どういう心構えで集会に集うべきでしょうか

ゴットホルド・ベック

それから、一行はカペナウムにはいった。そしてすぐに、イエスは安息日に会堂にはいって教えられた。人々は、その教えに驚いた。それはイエスが、律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように教えられたからである。

すると、すぐにまた、その会堂に汚れた霊につかれた人がいて、叫んで言った。「ナザレの人イエス。いったい私たちに何をしようというのです。あなたは私たちを滅ぼしに来たのでしょう。私はあなたがどなたか知っています。神の聖者です。」

イエスは彼をしかって、「黙れ。この人から出て行け。」と言われた。すると、その汚れた霊はその人をひきつけさせ、大声をあげて、その人から出て行った。

人々はみな驚いて、互いに論じ合って言った。「これはどうだ。権威のある、新しい教えではないか。汚れた霊をさえ戒められる。すると従うのだ。」

（マルコ　1・21〜28）

こうして、イエスの評判は、すぐに、ガリラヤ全地の至る所に広まった。

私たちは、一体どのような心構えで集会に集うべきでしょうか。主イエス様は、そして初代教会の兄弟姉妹たちはどういう心構えで集まっていたのでしょうか。

その当時、主イエス様は会堂に入られると、もちろん福音を宣べ伝えました。しかし、福音が宣べ伝えられるところには、いつも悪魔の攻撃があります。主イエス様は悪魔と闘うために会堂に入られた、とも言えるのです。主イエス様が悪魔に向かう武器は、いつも聖書のみことばでした。主イエス様が会堂に入られたのは、すばらしい説教をしたり、人々にほめられるためではありません。悪魔への攻撃のためでした。

1イエス様の悪魔への攻撃

当時の律法学者たちは、立派な教育を受けた人々でした。彼らはみな旧約聖書に精通していました。そして安息日ごとに聖書について教えていました。しかし、主イエス様と当時の律法学者たちとの間には、大変大きな違いがありました。

人々は、その教えに驚いた。それはイエスが、律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように教えられたからである。

（マルコ　1・22）

人々はみな驚いて、互いに論じ合って言った。「これはどうだ。権威のある、新しい教えではないか。汚れた霊をさえ戒められる。すると従うのだ。

（マルコ　1・27）

主イエス様の語られた「新しい教え」を通して、人々は目覚めさせられたのです。私たちは人間的な知恵による古い教えをもっているか、あるいは主イエス様の「新しい教え」をもっているかのどちらかです。

まことの神の権威をもっていない者は、いつも人間的な知恵を必要とします。しかし、人間的な知恵は人を目覚めさせることはできません。それは眠りから人々を呼び覚ますものではなく、眠りに誘う睡眠剤です。主イエス様は悪魔を攻撃するために、カペナウムの会堂に入って教えられました。この会堂には悪霊につかれて悪魔の奴隷となった人がおり、悪霊がその人の口を通して話をしていました。悪霊につかれた人は悪魔に支配されており、いつも危険な存在です。

どういう心構えで集会に集うべきでしょうか

すると、すぐにまた、その会堂に汚れた霊につかれた人がいて、叫んで言った。「ナザレの人イエス。いったい私たちに何をしようというのです。あなたは私たちを滅ぼしに来たのでしょう。私はあなたがどなたか知っています。神の聖者です。」

（マルコ　1・23〜24）

この汚れた霊につかれた人は、「私たち」という複数形を使って話しました。これは、その人の中に棲んでいた悪霊たちです。悪霊たちは、主イエス様を知っていました。つまり悪霊たちは、主イエス様が生きておられるまことの神の御子であるということを知っていて「私たちはあなたがどなたか知っています。神の聖者です」と話したのです。主イエス様の最大の敵である悪霊たちが「あなたは神の聖者であり、罪を全く知らない方である」という告白をするとは、驚くべきことです。これは主イエス様こそ約束の救い主であり、主イエス様こそがまことの解放者であることの証明でもあります。

また、悪霊たちがイエス様を見たとき、主イエスに向かって「止まって」と叫んだとドイツ語の聖書には書いてあります。イエス様が集会所を訪れるのは、いつも悪霊に対する攻撃でしたから、悪霊たちは「止まれ。こっちへ来ないでくれ」と主イエスに叫んだのです。主イエス様が会堂に行かれたわけは、悪霊たちを攻撃し、悪魔を滅ぼすため、また人を救うためでした。そこで悪魔が必死に抵抗し、主イエス様と悪霊たちとの間に闘いが生じました。どちらが勝つのでしょうか。

イエスは彼をしかって、「黙れ。この人から出て行け。」と言われた。すると、その汚れた霊はその人をひきつけさせ、大声をあげて、その人から出て行った。人々はみな驚いて、互いに論じ合って言った。「これはどうだ。権威のある、新しい教えではないか。汚れた霊をさえ戒められる。すると従うのだ。」

（マルコ　1・25〜27）

私たちの主イエス様は勝利者です。どんな悪魔も主イエス様に逆らうことはできません。主イエス様は、いついかなるところでも勝利されるお方です。主イエス様は神の聖者です。まったく聖い、透き通っておられるお方で、光そのものです。しかし、私たちは重荷を背負っている人間です。悩む者です。初代教会の人々もそうでした。彼らが一体どういう心構えでいたのか聖書からみてみましょう。

2初代教会の人々

そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。そして、一同の心に恐れが生じ、使徒たちによって、多くの不思議なわざとあかしの奇蹟が行なわれた。信者となった者たちはみないっしょにいて、いっさいの物を共有にしていた。そして、資産や持ち物を売っては、それぞれの必要に応じて、みなに分配していた。そして毎日、心を一つにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。

（使徒　2・42〜47）

初代教会の人々について言えることは、一生懸命にみことばを読んでいたということです。ですから、主はいつでも彼らに語りかけることがおできになったのです。彼らはお互いに密接な交わりをもっていて、大きな喜びをもってパン裂きをしていました。また、彼らは祈りの人々で、いつも主イエス様とのつながりをもっていました。彼らは日曜日だけでは

どういう心構えで集会に集うべきでしょうか

なく毎日集まり、一緒に食事をしました。彼らは毎日、主をほめたたえる人々だったのです。そのような彼らに応えて主は、使徒2章47節にあるように「主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった」のです。私たちも、家族、親戚、知り合いの人々が次々に救われるように期待をもって祈り続けましょう。私たちが期待をもって信ずれば、主イエス様は多くのことをなしてくださいます。主イエス様にいくら信頼してもしすぎるということはありません。初代教会の時代には、一日で三千人が信者になったこともあります（使徒　2・41）。それから、短い間に五千人ほどの男たちが導かれ、救われたのです（使徒　4・4）。

こうして神のことばは、ますます広まって行き、エルサレムで、弟子の数が非常にふえて行った。そして、多くの祭司たちが次々に信仰にはいった。（使徒　6・7）

聖書によると、五旬節のあと数週間のうちに主を信ずる者の数は一万人以上になったのです。この救われた人々は、毎日宮に集まりました。いつどのぐらいの期間かは分かりませんが、とにかく毎日集まったと書かれています。まだ主を知らない人々がその集まりに来ると、その人々は罪を自覚させられ、主を拝み、生きておられる神があなた方のうちにいると、認めざるを得なくなりました。

もしみなが預言をするなら、信者でない者や初心の者がはいって来たとき、その人はみなの者によって罪を示されます。みなにさばかれ、心の秘密があらわにされます。そうして、神が確かにあなたがたの中におられると言って、ひれ伏して神を拝むでしょう。

（1コリント　14・24～25）

主イエス様がカペナウムの会堂を訪れたのが悪魔に対する攻撃だったのと同じように、初代教会の人々が集会を訪れることもまた、悪魔に対する攻撃でした。初代教会の人々は悪魔を攻撃し、悪魔のわざを滅ぼすために集ったのです。また、備えられたたましいを主イエス様のところに導く、というただ一つの願いを持って集っていました。

3私たちの心構え

私たちの場合はどうでしょうか。私たちは熱心にみことばを慕っているでしょうか。主は毎日私たちに語りかけることがおできになるでしょうか。初代教会の人々のように心からの親しい交わりをもっているでしょうか。私たちはパン裂きを行い、主イエス様を思うとき、大きな喜びに満たされているでしょうか。いつも主イエス様と交わりをもつ祈りの人と言えるのでしょうか。できる限り頻繁に、集会に集まっているでしょうか。毎日、初代教会の兄弟姉妹たちと同じように、感謝と賛美に満ちているのでしょうか。

もし、私たちがこれらの質問に対してすべて「はい」と答えられるなら、主イエス様は毎日、人々をお救いになってくださるに違いありません。

「止まれ！」と悪霊たちはイエス様に叫びました。悪霊は、いまもこのように叫んでいます。私たちも、悪魔の攻撃にさらされています。一日中、どこにいても悪魔が私たちを攻撃しています。集会に集うときも、悪魔は攻撃しています。悪魔に攻撃されていないならば、その人は鉄砲の無駄玉のように、何の役にも立ちません。またもし、悪魔があなたに何もしないならば、あなたは悪魔を危険だとは思わず、主イエス様もあなたを必要とはしないでしょう。

悪魔は攻撃しています。自分が攻撃されていることは、いつでもどこででも知っているべきです。ですから、朝、目を覚ましたらまず、主イエス様をお

どういう心構えで集会に集うべきでしょうか

ぼえてください。あなたを愛してくださった主イエス様の大きな愛を考え、イエス様がきょうも自分のうちに住んでいることを感謝してください。

①主への飢え渇きをもって

私たちは、次の詩篇の作者のように、主に対する飢え渇きをもって集会に集って来ているでしょうか。

鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます。私のたましいは、神を、生ける神を求めて渇いています。いつ、私は行って、神の御前に出ましょうか。

（詩篇　42・1～2）

私たちは、この作者のような強い求めをもって集まっているでしょうか。また、悪魔を攻撃するくださ。また、ひとりひとりのために何を祈ったらよいか、イエス様にたずねてください。もし、主を知らない人々がいたら、その人々が、主イエス様のところへ導かれるように心から祈ってください。もし、主を知らない人々がいたら、悪魔の奴隷とされた人がそこにいるのだ、ということを覚えるべきです。悪魔の奴隷と、主に属し主に大いに愛されている者たちが、一緒にいるわけです。そこには、議論が起こるに違いありません。

③自分自身のために祈る

もちろん自分自身のためにも祈るべきです。何があっても、主イエス様をよりよく知りたい、という願いをもつことこそが大切です。「主よ、お話しください。しもべは聞いております」（1サムエル　3・10）、「私をあなたのかたちに変えてください」（2コリント　3・18）と、祈るべきです。

あらゆる、どんな集会も、私たちが考えている以上に大切です。集会に来て、自分は熱心な者だ、と考えると主イエス様を妨げてしまいます。「主イエス様をもっと知りたい、主イエス様に会いたい」という期待をもって来るべきです。反対に、集会に来て、自分は何の価値もない者だと考えるならば、それも主イエス様を妨げてしまうことになります。主イエス様は、あなたと話したいと思っておられるからです。

4全能の主があなたを必要としている

主イエス様は他の人のたましいを救うために、あなたをお用いになりたいと思っておられます。滅びに向かう人々に救いを伝えるために、主はあなたの心構えをもって集っているでしょうか。集会に集うとき、メッセージをする兄弟のために祈っているでしょうか。しばしばメッセージをするのに、とても話しにくい状態のときがあるものです。なぜでしょうか。悪魔が休むことをせず、いつでも攻撃しているからです。

また、メッセージをする兄弟方は、人間の知恵によることばではなく、御霊が主イエス様を証することができるようにと祈っているでしょうか。聖霊だけが主イエス様を知っておられ、主イエス様を証することができるお方です。

②集まった人々のために祈る

私たちは、集会に集うとき、来られたすべての人々のために祈っているでしょうか。これは大変必要なことです。集会の間、ひとりひとりのために祈って

どういう心構えで集会に集うべきでしょうか

「口」を必要としておられるのです。霊的に死んでいる人々を集会に招くために、主はあなたの「足」を必要としておられるのです。主イエス様とあなたが、共に働くことが求められています。主はあなたを必要としておられます。

もし、私たちが日曜学校を開くならば、悪魔に対する攻撃でもあります。悪魔はできるだけ、子どもたちを引きとめようとします。礼拝のときも同じです。悪魔は私たちに仕事の方が大切だとささやきます。主イエス様は、礼拝で私たちを特別に祝福したいと望んでおられます。初代教会の人々は、毎日集まり主を拝し、主のみ業に感謝しました。

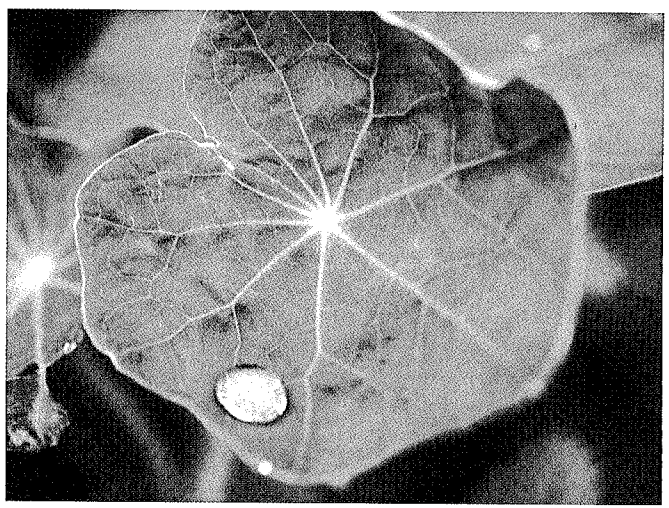
集会には、いつも悪魔の攻撃があります。悪魔は望みのない抵抗を繰り返しながら、人々のたましいを主イエス様に渡すまいとします。私たちは集会に行くたびに、大切な一つの願い「主イエス様のためにたましいを救う」という願いに満たされていなければなりません。

主イエス様は悪魔と結びついた人を「神の子」とするために、あなたを必要としておられます。主は何でもできるお方です。けれども、このお方は私たちを必要としておられるのです。それだけでなく、このお方は私たちに必要な力を必ずお与えになります。

イエスは十二弟子を呼び寄せて、汚れた霊どもを制する権威をお授けになった。霊どもを追い出し、あらゆる病気、あらゆるわずらいを直すためであった。…病人を直し、死人を生き返らせ、らい病人をきよめ、悪霊を追い出しなさい。あなたがたは、ただで受けたのだから、ただで与えなさい。（マタイ　10・1、8）

ここで「ただで受けた」と書かれているのは、弟子たちが力を受けたことを指しています。弟子たちは力を受けました。私たちも、力を受けたでしょうか。もし、受けたなら、その力を用いることができます。何でもおできになるお方が、あなたを必要としています。主はあなたに、超自然の力を提供しておられるのです。

主イエス様がカペナウムの集会を訪れたのは、悪魔に対する攻撃だったのです。初代教会の人々の集まりもいつも悪魔に対する攻撃でした。いまこの時代に集会に集まる私たちも、悪魔を攻撃しているのでしょうか。私たちを通して、人々が主イエス様のところに導かれているのでしょうか。全能の主が、私たちを必要としておられるのです。



どういう心構えで集会に集うべきでしょうか



神と共に歩む人生

ヴィルヘルム・ブッシュ（8回連載、第1回）

ヴィルヘルム・ブッシュ兄弟について

ヴォルフガング・ビューネ

ヴィルヘルム・ブッシュ兄弟が一九六六年六月二十日夜にリューベックの病院で急逝されたとのニュースは、マスコミ各社によって直ちにドイツ全土に報道され、多くの人々に衝撃を与えました。

ブッシュ兄弟とは、どのような人だったのでしょうか。

彼は、死後に知名度が大きく上がった数少ない人物の一人です。生きている時にはドイツ語圏でしか知られていませんでしたが、今ではシベリア、南米、南アフリカに至るまでよく知られています。彼の著書は生前すでに数十万部を越えていましたが、没後、さらに多くの言葉に翻訳されて各国に広まり、今や数百万部を越え、世界中で愛読されています。彼の著書「神と共に歩む人生」を読んだおかげで「私の人生は根底から変わった」と証言する人々が世界各国で増えています。

では、ブッシュ兄弟はどのような経歴の持ち主だったのでしょうか。

彼は著名な牧師の子として生まれましたが、若い頃は神や信仰とは全く無縁でした。第一次世界大戦当時、彼は若い将校として戦争に参加しましたが、その頃は神に対して何の関心も抱いていませんでした。ましてや将来、自分が教会で神を宣べ伝えることになろうとは夢にも思っていませんでした。

彼が従軍して数ヵ月後、フランスのヴェルダンの戦いの停戦期間中に、ある事件に遭遇しました。彼

が戦友の一人と冗談を言いあっていた時、突然敵の砲弾が近くで炸裂し、その破片が戦友の心臓を引き裂いたのです。即死でした。

その時のことをブッシュ兄弟は次のように書いています。「その瞬間、巨大な眩しい光が私の頭上を照らしました。私は死んだ戦友が聖なる神の前に立たされているのだ、と直感しました。もし、私の座っていた位置が戦友と入れ替わっていたら、死ぬのは確実に私だったのです。そして神の前に立たされるのも間違いなくこの私だったのです。気がつくと、私は手を組んでひたすら神に祈っていました。神に祈ることなど久しく忘れていたのに。『神様、どうすれば私が永遠の地獄に行かなくてすむかを知るまで、私を生かし、敵弾から守ってください。お願いします』と。

数日後、私は壊れかけた農家の小屋の中で、新約聖書を手にしてひざまずいて、『主イエス様。聖書にはあなたが罪人を赦し、聖めるために父なる神から遣わされ、十字架につかれた、と書いてあります。私は罪人です。性格も悪く、その性格は将来も変わることができるとはお約束できません。でも、私はこの戦争で敵弾に当たって何も分からないうちに地獄に行きたくはないのです。とは言え、どうしたらいいか分からないので、私自身をあなた様に明け渡すことにします。ですから、私をお好きなように存分に取り扱ってください』と祈りました。その時は何の答えもなかったように思ったのですが、祈り終えて小屋から出た瞬間、『私は私の神、主を見出した』と確信しました」

それ以来ヴィルヘルム・ブッシュ兄弟は、聖書の神に対して生涯誠実であり続けました。彼はヴェルダンの戦いの後で主に仕える人になり、最初はビーレフェルトで、次いでエッセンで死ぬまで鉱山労働者に宣教し、多くの若者にイエス・キリストへの道を宣べ伝えました。

一九六六年六月二十四日、私自身も大勢の人々とともに、涙を流しながらブッシュ兄弟の棺が埋葬される墓地まで歩きました。私たちの人生を決定的に変えてくれたのはこの牧師だったからです。

後にドイツ大統領となるグスターフ・ハイネマン氏は、追悼式の席上、ブッシュ兄弟の人となりを、「彼が行くところ、いつでも、どこでも、何かが起こりました。彼の心の奥に息づいていたのは、何よりも神に対する信仰の深さ、そして主の使いとして何事にもめげない神への燃えるような忠誠心でした」と語りました。

半世紀以上たった今でも、彼のメッセージは時代遅れになってはいません。現代の社会で過去数十年間にもたらされた物質的な繁栄は、人間が生きていく真の意味と目的に対して何の解決も与えてはいません。ブッシュ兄弟が一生をかけて説き続けたように、ただイエス・キリストだけが、人生の意味と目的に対する真実にして唯一の回答です。

私はこのことを、この本を通してあなた自身で確かめていただきたいと、切に願っています。



神と共に歩む人生

ヴィルヘルム・ブッシュ

第一章　なぜ「イエス・キリスト」なのか？

大きな都市で長い間牧師をしていると、よく次のようなことを聞かれます。「神はなぜ、この世にひどいことが起こるのを許されるのでしょうか」、また、「あなたのお話はいつもイエス・キリストのことばかりで、少しばかり狂信的に聞こえます。宗教は、どんな宗教でもよいのではないでしょうか。肝心なのは、目に見えない高い所にある大きな存在を感じているかどうかではないでしょうか」など。私と同じフランクフルト出身のゲーテも、次のように言っています。「人間は、自分が感じたことがすべてであると考える存在だ」と。

今、この本を読み始めた方の中にも、次のように考える方が多いと思います。「宗教は否定しない。しかし、信仰する対象はイエス・キリストでも、釈迦でも、アラーの神でも、孔子でも、または運命論でもいいではないか。肝心なのは何かを信じていることであって、一つの神に限定することはない。それは各人の自由だ」と。

かつて、ある老婦人が私に言ったことがあります。「あなたはイエス・キリストのことばかり話されますが、キリスト自身が『わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。（ヨハネ　14・2）』と言われたではありませんか」と。恐らくこの方は、神様の家はいっぱいある。だから特にイエス・キリストでなくてもいいじゃないか、と言いたかったのでしょう。けれども彼女はイエス様の言葉を完全に誤解しています。

ベルリン空港の出入国検査所で、私の前にいた大柄な男性が検査官に呼び止められ、「パスポートの有効期限が切れていますよ」と言われました。するとその大柄な男性は次のように言い返したのです。「小さいことにこだわるのはやめな。肝心なのはパスポートを持っていることだろ」。すると検査官はすぐ怒鳴り返しました。「肝心なのは、有効なパスポートを持っているかどうかだよ」

信仰についてもこれと同じことが言えるのではないでしょうか。

「信じるものがあれば何でもいい」というのではなくて、「正しい信仰であるかどうか」が問題なのです。長い一生の間、厳しい試練の時にも常に支えとなり、希望を持って人生を生き抜くことができる、そのような真の信仰であるかどうか、また、その信仰によって平安のうちに死んでいくことができるかどうか、が重要なのです。その信仰が正しいかどうかは、死に直面した時に疑問の余地なく明らかになります。

天地を創造された神のひとり子である主イエス様を信じる信仰だけが、正しく生き、正しく死ぬことができる唯一の信仰です。イエス様ご自身が「わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。（ヨハネ　14・2）」と言われた真意は、ヨハネ10章9節の聖句で語られています。つまり、「天の御国のイエス様のそばには、私たちの住まいがたくさん用意されている。そして、その家に入るためには、イエス様という門を通してでなければ到達できない」ということです。まことの神の住まい、永遠の天の御国に入る門は、ただ一つ、イエス様しかないのです。

わたしは門です。だれでも、わたしを通ってはいるなら、救われます。　（ヨハネ　10・9）

イエス様は人が罪赦され、救われ、永遠のいのちに生きることができる、唯一の門です。しかし多くの

人々はそのことを聞きたがりません。人々は神について何時間でも議論しますが、そこで論じられるのは、その人だけの思い込みによる誤った神概念です。

イエス様は、このような空しい議論の対象とはなり得ないお方です。私が言いたいのは、「神の御子であるイエス様を信じる信仰だけが、人を救うことができ、人を幸せにすることができる信仰だ」ということです。そのような信仰によってのみ、人は真のいのちに生きることができ、また、平安のうちに死ぬことができるのです。

しかし、この真理を説いてまわることが、私の周りの人々には異常な行為に見えることを、私はある体験によって知りました。何年か前、私はエッセンの街を歩いていました。道端には二人の男性が立っていました。彼らが鉱山労働者であることは明らかでしたが、そのうちの一人が「こんにちは」と私に挨拶してくれました。私は彼に近づき「どこかでお会いしましたか?」と尋ねると、彼はもう一人の仲間に笑顔でこう言ったのです。「この方が牧師のブッシュさんだよ。若いけれどしっかりした方だろう?」と。「これはどうも」と私が言ったところ、彼はこう続けました。「ところが残念なことに、この方は頭がおかしいんだ」。私は心外でしたので尋ねました。「一体、私の頭のどこがおかしいんですか」。すると彼はこう言ったのです。「この人は若くてしっかりしているように見えるけど、いつもイエス・キリストのことしか話さないんだ」

これを聞いて私は嬉しくなりました。「私は頭がおかしいのではありません。あなたが百年後に永遠の世界に入っているかどうかが心配なのです。あなたが永遠の天の御国に入れるかどうかは、ただ一つ、あなたがイエス様を知っているかどうかにかかっています。あなたが死後、天国にいるか地獄にいるかは、ただイエス様次第で決まります。そこで聞きたいのですが、あなたはイエス様を知っていますか?」その男は笑いながら言いました。「ほらね。またいつもの話が始まったぞ」

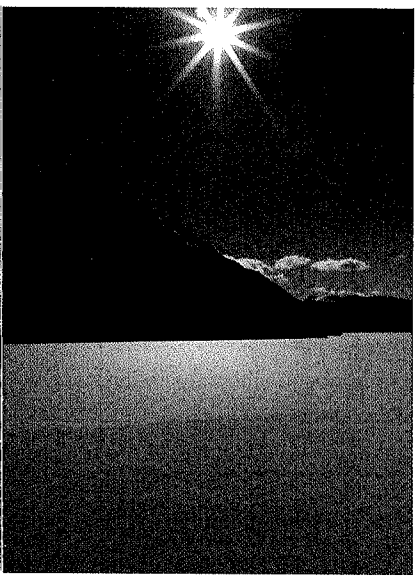
ではここで、その「いつもの話」をあなたにも語りたいのですが、まず聖書の言葉を一つ引用しましょう。

御子(イエス様)を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。

(1ヨハネ 5・12)

あなたはどこかでイエス様のことを聞いたことがあると思います。たとえばあなたがミッション系の学校の出身者なら、きっと聖書の時間があったことでしょう。でも、ただイエス様のことを聞いたことがある、というだけでは、「イエス様を持つ者」とは言えません。聖書にある「御子(イエス様)を持つ者」とは、「持っている者」です。「御子を持つ者はいのちを持って」いるのです。それはこの地上の生涯にとどまらず、死後、永遠にそうなのです。続いて聖書は次のように言い切っています。「神の御子を持たない者はいのちを持っていません」と。

ですから私は、あなた自身のためにお勧めしたいのです。どうか、ぜひイエス様を受け入れて、あなたの人生をイエス様に明け渡してください。なぜならイエス様なしの人生は、とても惨めなものだからです。次に、「なぜイエス様がすべてのすべてであり、また、イエス様を信じる信仰だけが、唯一正しいものであるか」ということを、私の体験を交えてお話ししたいと思います。



神の啓示であるイエス様

よく、「私だって神様の存在は認めます。しかし、どうしてイエス・キリストでなければならないのですか?」というような質問を受けます。この答は明白です。天地万物を創造された神、全知全能の神は、あまりにも大きなお方なので、人間の知識や知恵によっては理解しえない存在です。このことをある人は次のように表現しました。「神はご自身を隠したまう」と。ですから、私たちが神に近づこうとすれば、神のひとり子であり、人間の姿をとってこの地上に来られ、いのちを捨てて私たちの罪を贖ってくださったイエス様の導きなくしては無理なのです。

人間は過去、自分の小さな知識や欲望にあわせて、自分に都合のいい神々を勝手に作り上げてきました。この世にひしめいている、いわゆる宗教というものは、人間の欲望や願いを投影した虚しい幻想に過ぎないのです。

しかし、イエス様こそは、まことの神を知る唯一の門であり、道です。イエス様を抜きにしては、まことの神を知ることは不可能です。イエス様は神の啓示そのものであり、父なる神はイエス様を通して私たちの前にその姿を現わしておられるのです。

このことをもっと分かりやすく、視覚的に説明しましょう。まず、非常に厚い霧の壁を想像してください。この霧の壁の向こう側に、まことの神が存在しています。人間は神なしに生きていくことができないと気がつくと、その神を探して霧の壁の中に入り込んで行こうとします。これがこの世に多く見られる宗教活動です。これらの宗教は、それぞれが独自の神を空想で描いています。そしてこれらの宗教に共通している点は、霧の中で迷い、自分たちが描いた幻想を神だと思い込み、しかもそれを霧の中で再び見失っていることです。このようなやり方では、まことの神、唯一絶対の神にたどり着くことはできないのです。

神は「ご自身を隠したもう神」です。イザヤという人はこのことを啓示によって知らせられ、「主よ。私たちはあなたのところには行けません。この霧の壁を裂いて私たちのところに来てくださらなければ」と叫びました。神はまさしくこの叫びをお聞きになりました。イエス様というひとり子をこの地上に遣わすことによって、霧の壁を裂いて私たちのところに来てくださったのです。

イエス様がこの地上にお生まれになった時、御使いはベツレヘムの野原でこう叫びました。

> きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。
>
> (ルカ　2・11)

> いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。
>
> (ルカ　2・14)

神が私たちのところに来られたのです。イエス様はおっしゃいました。

> わたしを見たものは、父を見たのです。
>
> (ヨハネ　14・9)

イエス様なしに、神について知ることは決してできません。神についての確信を得ることができるのは、ただイエス様を通してだけです。では、なぜイエス様が必要なのでしょうか?次に、その理由を説明しましょう。

イエス様は、私たちを救うための神の愛

以前、あるジャーナリストのインタビューを受けた時、「あなたはなぜイエス・キリストについての講演をして回るのですか?」と尋ねられて、私はこう答えました。「私は、人々が永遠の地獄に行くのではないか、と恐れているからです」。彼は笑いながら言いました。「そんなことはあり得ない」。そこで私は言いました。「百年経ったら、あなたが正しいか、それとも神の言葉が正しいか、分かる時が来ます。あなたは神を恐れますか?」すると彼は答えました。「神を恐れたことはありません。だって、神は私たちが恐れるような存在ではないでしょう?」

そこで私は続けて、「あなたが神についてほんの少しでも知っておられるなら、神は聖であり義であり、私たちの罪を裁かれる力を持っておられるお方だと分かっているはずです。裁き主である神ほど恐ろしい方はありません。あなたは『神は優しい方だ』と思っておられるようですが、それは神の一面に過ぎません。聖書は多くのところで、『生ける神の御前に出ることほど恐ろしいことはない』と言っています」と説明しました。

あなたは今までに神を恐れたことがありますか?もしなければ、あなたには聖なる神と、あなたの罪深い人生についての恐るべき真実が全く見えていないのです。神を恐れ始めると次のような疑問が生じるはずです。「私は神の御前にどのようにして立つことができようか?」と。神の御怒りを恐れなくなったことは、現代に生きる人間の最も愚かな過ちです。罪に対するまことの神の御怒りを、もはや真剣に受け止めようとしなくなったことは、今の世の恐るべき愚かさのしるしなのです。

私たち人間は神の前に多くの罪を犯しています。このことは否定できない事実です。そしてもし、その犯した罪を帳消しにするために神の御前に何かを差し出さなければならないとすれば、いったい何によってその大きな罪を贖うことができるでしょうか?また、神が厳格にその罪の償いを私たちに要求なさるとしたら、それはきわめて厳しいものとならざるを得ないでしょう。まして、もし神が御怒りだけをもって私たちに向かわれるとすれば、それは、真に恐るべきことになるでしょう。私たちは、もっともっと神を恐れなければならない存在であり、本来は、神の御前に立つことなどできないものなのです。

しかし神は恐ろしく、厳しいだけのお方ではありません。私たちを心から愛してくださるお方でもあります。神は、ご自分のひとり子を十字架につけることによって、私たちの罪をすべて聖め、罪の赦しを成し遂げてくださいました。これこそが私たちに対する神の愛の表れです。「人間の罪に対する神の御怒りからの解放はどこにあるのだろうか?救いは一体どこにあるのだろうか?」といった疑問に対する疑う余地のない神の回答が、イエス様の十字架のみわざです。「私はあなたがた人間を愛するがゆえに、わたしのひとり子イエス・キリストを十字架につけて罪を贖った」。これこそが、神の愛です。私たちはいつも、「私たちを救う神の愛とは、イエス様ご自身である」という事実を心に刻むべきです。それゆえ、神は次のように望んでおられます。

> 神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。（1テモテ 2・4）

しかし義なる神は、「不義である」ことがおできにならないお方であり、罪に対して黙っていることがおできになりません。ですから人類の救いのため、贖いのために、御子を与えてくださったのです。

さて、ここで私と一緒に約二千年前のエルサレムに行ってみることにしましょう。そこには丘があり、何千人もの人々が集まっています。そしてその群衆の中心には、三つの十字架が立っています。左の十字架上の男は、私たちと同じ罪人です。右側の男も同じです。しかし、いばらの冠をつけて真ん中にいる人こそは、生ける神の御子イエス・キリストです。

キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。

（ピリピ　2・6～8）

しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

（イザヤ　53・5）

イエス様は世の罪を背負って十字架につき、いのちをお捨てになりました。それは、人間の罪を赦し、神との和解のために捧げられた神の小羊です。この貴い犠牲であるイエス様のご愛にあなたが気づかずにいる限り、あなたは神の救いの外にあり、依然として神の怒りの下に置かれています。たとえあなたがそのことに気づかなくても、また、たとえあなたがそれを否定しても、その事実は変わらないのです。ただイエス様のもとに来る者だけが、真の救いに入れられ、神の平和のうちにあります。

私の体験談を一つお話ししましょう。第一次世界大戦当時、私は砲兵で、その武器は防盾（敵の弾丸を防ぐ盾）のついた大砲でした。ある時、私たちは、

前方に歩兵部隊がいない状態で前線に立たされ、そこに相手の軍隊が攻撃を仕掛けてきたのです。敵の集中砲火が私たちの大砲に向かって雹のように降り注ぎました。しかし、防盾は堅固で、私たちはその後ろで守られました。もし、ちょっとでも防盾の外に手を出したら、その手は即座に銃弾で穴だらけにされていたことでしょう。しかし、私たちは防盾によって安全に守られたのです。

まさしくイエス様は、私にとっての「防盾」なのです。私はイエス様なしには神の裁きの前で滅びてしまうことでしょう。イエス様なしに私が何かをしても、心には全く平安がないことでしょう。イエス様なしには、恐れずに死ぬことはできないでしょう。私たちは、イエス様なしには永遠の滅びに向かうことになるのです。永遠の滅びほど恐るべき状態はありません。そしてそれは実際にあるのです。けれども私たちは、イエス様の十字架の背後に立つ時、ちょうど防盾の後ろにいるのと同じように、すべてから守られるのです。人生の戦いともいうべき過酷な体験を通して、私たちはイエス様こそが救い主であり、贖い主であるということを事実として知ることができるようになります。イエス様は私たちを救うための神の愛です。神はすべての人が救われることを望んでおられます。だからこそ、私たちの救いと贖いのために、そのひとり子をお与えになったのです。それはまさに、「あなた」のために神がなされたことなのです。さて次に、私たちは何のためにイエス様を必要とするのでしょうか。



神と共に歩む人生

イエス様は「私たちの人生の最大の問題」を解決できる唯一のお方

「私たちの人生最大の問題」が一体何であるか、あなたはご存知ですか?もしあなたが老人なら、日々老化が進んでいく内臓の状態が最大の問題だと考えることでしょう。あなたが若者なら、異性に対する愛情が最大の問題だと考えるでしょう。人は誰でも自分自身の問題を抱えています。しかし「私たちの人生で最大の問題」とは、「神に対する私たちの債務」なのです。

私は青年の頃から牧師をしていますが、若者たちに福音を伝えるために、いつも分かりやすいたとえ話を考えていました。その一つは次のようなものです。

「あなたの首に、生まれた時から鉄の鎖が取り付けられていると想像してみてください。そしてあなたが罪を犯すたびに、その鎖に新しい環が一つずつ増えていくのです。汚れた思いを抱くたびに鉄の環が一つ。母に反抗するたびに一つ。人の悪口を言うたびにまた一つ。神を忘れて祈らない一日を送るたびに一つ。不誠実な嘘のたびに一つ、と増えていくのです」

考えてみてください。私たちに取り付けられた鉄の環が一体どれほど長く繋がっていくかを。これが私たちの神への債務、罪の鎖なのです。私たちの神への債務は目には見えませんが、神から見ればこのように明白なものなのです。神の御前で、私たちはこのとてつもなく長い鎖をひきずって生きているのです。

人はこの神への債務の鎖を引きずったままでは、決して幸せになることはできません。しかし、この神への債務の鎖を断ち切ることは、牧師にも、祭司にもできません。それでは、人はこの神への債務という重くて長い鎖をひきずったままで、一生を過ごさなければならないのでしょうか?

聖書は言っています。

人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。（ガラテヤ　6・7）

しかしながら、私たちには「神への債務」という人生最大の問題を解決してくださる唯一のお方、イエス様がおられるのです。イエス様は私の鉄の鎖、罪の負い目から解放してくださるために、十字架の上で犠牲となって死なれたのです。イエス・キリストが犠牲となっていのちを捨ててくださったがゆえに、私たちの罪の負い目は贖われ、赦されました。イエス様こそは、私の債務の鎖を取り除くことができる唯一のお方です。

イエス様によって「私の罪が赦されている」という確信をいただいて初めて、人は「神への債務」から解放されます。それは人生における最大の「解放」です。そして人生の終焉に当たり、「イエス様を信じ、罪赦された確信」を持って死んで行くのか、そうでなくて「イエス様を拒否して罪の中で死を迎え、永遠の滅びに向う」のかが明らかになります。万一、罪の問題をそのままにして死を迎えるとすれば、それは何と恐ろしいことでしょう。

私の友人の中には、自分はいい人間であり、悪いことはせず、生涯正しかったと信じている人々がいます。しかし、人間は死の瞬間に、自分の人生のすべてを携えて神の御前に引き出されていくことに気づきます。そこにはその人が苦労して築きあげてきた地位も財産も、業績も成果も、何一つ持っていくことはできません。何も持たず、ただその人の罪の債務だけを持って、神の御前に引き出されるのです。これが人間の死だという事を知りさえすれば、あなたは、「何と恐ろしいことだ。私は今すぐ罪の問題を解決しなければならない」と思われるでしょう。

しかしもし、あなたがイエス・キリストを知り、信じれば、あなたは永遠の滅びから救い出されるのです。イエス様はあなたの罪を赦してくださる唯一のお方です。しかもその罪からの解放の手段は、今、既に神によって目の前に用意され、あなたの前に差し出されているのです。

私はまだ若い十八歳の時に、戦争の体験を通して「罪の赦しとは何か」を知り、神への債務の重い鎖から解き放たれることができました。次の歌にある通りです。

「『罪は赦された』。これこそ私たちが真に生きていくためのみことばだ。苦しんでいるたましいのために、イエス様は十字架について、いのちを捨てられた。イエス様の御名によって、私たちは救われている」

どうか、あなたご自身もこのことを体験してください。今すぐイエス様のところに行ってください。イエス様は、あなたが来られるのを待っておられます。そしてイエス様に心の奥を打ち明けてください。

「主よ、私の人生は間違いだらけでした。神様の御前で罪の負い目に満ちていました。私はこのことを隠して、人前ではいいことだけしか言ってきませんでした。私のあなたへの債務を、今あなたの御前に包み隠さず差し出します。あなたの十字架の血潮が、私の罪の負い目をすべて帳消しにしてくださることを信じます」と。

イエス様の罪の赦しとは、何とすばらしい恵みでしょうか。十七世紀のイギリスに、ジョン・バニヤンという人がいました。彼はその信仰のゆえに長年投獄されていましたが、彼は牢獄の中で、現代も愛読されているすばらしい本を記しました。その本の中で彼は、キリスト者の人生を、非常に危険で冒険に満ちた歩みとして描いています。その本は次のように始まっています。

「この世」という町に、ある人が住んでいましたが、突然彼は心から突き動かされて叫びました。「ここは何かがおかしい。私には平安がない。私は不幸せだ。ここから出なければならない」と。彼は妻に話しましたが、こう言われました。「あなたは心が疲れているのです。休養しては？」と。しかしいくら休んでも何も変わらず、心のざわめきは残りました。そしてある日、彼は何の解決も見い出せないこの町を出なければならない、と気づいたのです。

そこで彼は町から逃げ出して放浪の旅に出ましたが、その途中で自分が背中に大きな重荷を背負っていることに気がつきました。その重荷は下ろすことができず、歩けば歩くほど重くのしかかってきました。これまで彼はこの重荷を背負うことを当然に思い、その重さを感じてはいなかったのです。しかし「この世」という町から離れてみると、その重荷はますます大きくなっていきました。彼は苦しみながら山の小道をたどっていきましたが、ある曲がり角



を前にして、もはや一歩も歩けなくなりました。その時、彼の目の前に、十字架が浮かんだのです。彼は意識を失って十字架の前に崩れ落ち、十字架にしがみついてそれを見上げたのです。その瞬間、彼の重荷が解け、音を立てて断崖絶壁に落ちていくのを感じました。

これこそ、イエス・キリストの十字架の下で人が何を体験できるかを表している、実にすばらしい情景です。そこで彼は次のように書いています。

「神の霊の導きによって十字架を見上げた時、私は小羊が私のために血を流され、十字架の上で死なれたことの意味を知った。その時、私は二つの奇蹟を見たのだ。イエス・キリストの大きな愛の奇蹟と、私の大きな罪の贖いとを」

私たちの罪の赦しは、イエス様が私の代わりに債務を支払ってくださったことによって成し遂げられました。私の債務の鎖は解かれ、そして私の重荷は取り除かれたのです。イエス様だけが、私たちに罪の赦しを与えることのできるお方です。

ここまで私たちは、何のためにイエス様が必要なのかを考えてきました。次に、なぜ私がイエス様を信じるのか、その理由をお話ししましょう。

主イエス様は、良き羊飼い

あなたはこれまで生きてこられて、人間がいかに孤独で、人生がいかに空しいかを、身にしみて実感されたことでしょう。そしてその時、「私には何かが欠けている。それは何だろうか?」と考え込まれた経験をお持ちではないでしょうか。そのような方に、是非、私はお伝えしたいのです。あなたには、「生けるまことの神、救い主が欠けています。そのお方こそ、イエス・キリストです」と。

先ほどから述べているように、イエス様は私たち

の罪の負い目、神への債務を贖うために、十字架につき、いのちを捨ててくださいました。

彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

（イザヤ　53・5）

イエス様は十字架の上でいのちを捨てられた後、岩を掘って作った墓の中に納められました。墓の入口は重い岩で塞がれ、番兵たちが見張っていました。安息日の次の日に、マグダラのマリヤと、ほかのマリヤが墓を見に来ました。すると大きな地震が起こって、主の使いが天から降りて来たのです。

それ(大きな地震が起こったの)は、主の使いが天から降りて来て、石をわきへころがして、その上にすわったからである。その顔は、いなずまのように輝き、その衣は雪のように白かった。番兵たちは御使いを見て恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。

（マタイ　28・2〜4）

また、ヨハネの福音書には、この時の状況が次のように書き記されています。

さて、週の初めの日に、マグダラのマリヤは、朝早くまだ暗いうちに墓に来た。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。…「だれかが私の主を取って行きました。どこに置いたのか、私にはわからないのです。」彼女はこう言ってから、うしろを振り向いた。すると、イエスが立っておられるのを見た。…イエスは彼女に言われた。「マリヤ。」彼女は振り向いて、ヘブル語で、「ラボニ(すなわち、先生)。」とイエスに言った。

（ヨハネ　20・1、13〜14、16）

私たちも同じように、イエス様を必要としています。名前を呼びかけてくださるお方を必要としています。

私自身も人生のある時、真っ暗な深い淵に投げ込まれたことがありました。私はイエス様を信じているということで、ナチの刑務所に投げ込まれたのです。

私はこの刑務所で恐ろしい体験をしました。強制収容所に送り込まれる人々が大勢運ばれて来たのです。彼らは重罪人と多くのユダヤ人でした。彼らはこれから送り込まれる強制収容所で何が行なわれるのかを予感していました。ある土曜日の夜、刑務所の独房には絶望が満ち、皆がわめき叫びながら壁やドアを猛烈な音を立てて叩き始めました。不安になった看守たちは、ピストルを天井に向けて威嚇発射し、走り回って騒いでいる人々を殴りました。私は独房の中で震えていました。

しかし私はすぐに、「イエス様がおられる」ということに気がつきました。私は小さな声で独房の中でこう言い続けました。「イエス様、イエス様、イエス様」。数分後、急にあたりは静かになりました。私はイエス様を呼び求めましたが、刑務所の中の誰一人として私が祈っていることを知りませんでした。ただ私の祈りは、イエス様だけに聞こえたのです。

刑務所では厳しく禁止されていましたが、私は大声で歌い始めました。「イエス様は私の喜び。私の楽しみ。イエス様は私の誇り。ああ、いつまでですか。私の心は恐れています。私はあなたを求めています」と。

囚人たちは皆、聞いていました。看守たちも一言も発しませんでした。そこで私はさらに大声で歌い続けたのでした。「雷鳴の轟きに、全世界が震え上がろうとも、私のそばにはイエス様がおられる」

この時ほど私は、生ける救い主を持っていることの深い意味を強く感じたことはありませんでした。

既に述べてきた通り、私たちは誰もが必ず一度は大きな苦しみ、「死」を通らなければなりません。私は時々、次のように非難されます。「あなたは、いつも死のことを語って、私たちを脅かします」。それで私は言います。「死について、特にあなたを脅かしているわけではありません。私たちは皆、本当は心の底で死を恐れているでしょう?」と。だから、死んでいく時に、イエス様がともにいてくださるということは、たとえようのない慰めであり、平安なのです。

またある人は、次のように言いました。「現代人は、死ぬことよりも生きることに恐れを持っているのではないでしょうか。生きることは、死ぬことよりももっと恐ろしいことではないでしょうか?」と。まさにその通りです。だからこそ、イエス様が必要なのです。イエス様を信じれば、その苦しい人生のすべての間、また死後も、救い主、慰め主、信頼できる主を持つことができるのです。

私は今までにいろいろな所で次の話をしてきましたが、あなたのためにもう一度話しましょう。それは実際にあった話です。

かつてエッセンという町で、実業界のある名士と知り合いました。彼は、「あなたが子供たちに信仰の話をしてくださるのは、とてもいいことだと思いますよ。失礼だがこの百マルクをお仕事のために使ってください」と言いました。そこで私は質問しました。「あなたご自身はいかがですか?」。すると彼は答えました。「いやいや、私は既に自分の世界観をしっかり持っていますからね」。彼は大変いい方でしたが、神からは遠く離れていたのです。

さて、このことがあってからしばらくして、私は結婚式の司式をすることになりました。新郎新婦のために参列した方々は十数名で、大きくてがらんとした教会はやや寂しい雰囲気が漂っていました。そしてかつてエッセンで知り合ったあの名士がこの式

の媒酌人でした。彼は優雅な燕尾服を着て、シルクハットを手に持っていましたが、教会の中でどういう態度を取るべきか分からずに戸惑っていました。ここでひざまずくべきなのか、十字を切るべきなのか、何が正しいのか、と自問しているようでした。そこで私は彼の気持ちをくつろがせるために、シルクハットを受け取って横に置いてあげました。やがて参会者が聖歌を歌い始めました。彼は聖歌など歌ったことがなかったのでしょう。皆といっしょに歌っている素振りをしていました。

そこで、不思議なことが起こりました。突然、数十人の少女たちの歌声が会堂に響きわたったのです。新婦は子供礼拝の助手を勤めていたので、子供たちが賛美をしてくれたのでした。その歌はよく知られている子供の歌で、かわいい声をそろえて、皆が一生懸命歌いました。「私たちはイエス様の子羊だから、子羊だから。いつも喜んでいます。私たちの良い牧者のことを」

その名士は歌声を聞くと、突然その場に屈みこんでしまいました。「具合でも悪くなったのだろうか」と私は思いました。彼は手で顔を覆って震えていました。「医者を呼ばなくちゃ」と思った瞬間、私は彼が泣いていることに気がつきました。子供たちは、なおも歌い続けていました。「私の良い牧者は、私に良くしてくださいます。彼は私を愛し、私のことを知っておられます。私の名を呼んでくださいます。彼のやさしい杖のもとに、私は身を置きます。私には甘い牧草のある牧場があるのです」

実業界の名士は、そこに座りこんで泣いていました。その時、私はこのがらんとした教会で一体何が起きたのかを悟りました。彼の心の中に、一瞬にして「子供たちは私が持っていないものを持っている。つまり『良い牧者』を。しかし、私は孤独で失われた男なのだ」という思いが浮かんだのです。

あなたもこの子供たちと同じように、「私はイエス・キリストの群れに属しており、良い牧者を持っていることを喜びとします」と心から言えるようになれば、どんなに素晴らしいことでしょう。

私がなぜイエス様を信じるかと言うと、「イエス様が私の良い牧者であり、私の友であり、また、私をまことのいのちに救い出してくださったお方」だからです。なぜ私たちにはイエス様が必要なのでしょうか。最後にもう一つお話ししましょう。

いのちの君であるイエス様

数年前ボェーマーヴァルトで開かれた修養会に出席して後、私は迎えの車を待って翌日までそこに残りました。参加者が帰ってしまい泊まる所がなくなったので、その昔王侯が持っていた狩猟用の城に一泊しました。そこに住んでいるのは、一人の森林監視



神と共に歩む人生

員だけでした。その城の半分は壊れかけていて、電気もありませんでしたが、大きな居間には暖炉が燃えていました。監視員は私に石油ランプを渡して「おやすみなさい」と言いました。外はものすごい嵐でした。家の周囲のもみの木には豪雨が降り注いで、まるでサスペンス映画のようでした。私は本を持ってこなかったので、暖炉の上に置いてある小冊子を手に取って、薄暗い石油ランプの灯で読み始めました。ところがこの小冊子には、驚くようなひどいことが書かれていたのです。そこには「ある医者の、死に対する怒り」がぶちまけられていたのです。要約すると、「ああ、死よ。人類の宿敵よ。私は患者の延命のために寝食を忘れて頑張る。やっとその人が峠を越えたと思った時に、お前は嘲るかのようにベッドの背後から攻撃を仕掛け、それまでのすべての努力を水泡に帰させてしまう。私は病人を直すために必死だが、お前はその努力をすべて台無しにしてくれるのだ。死よ、お前はいかさま師だ。敵だ」という内容でした。

その記事からは、死に対する憎しみしか読み取ることができませんでした。そして最後には絶望的な文字が綴られていました。「死よ。お前は終止符であり、感嘆符だ。せめてお前が感嘆符だけであればまだましなのに、私がお前を見つめる時、お前は疑問符に変身する。そして私は自問する。死は一体終わりなのか?それとも終わりではないのか?後に何かが続くのか?死よ、お前は意地の悪い疑問符だ」

医学に従事する者として日々死に直面していると、そう言いたくもなるのでしょう。しかし、それは死の一面に過ぎません。そして私が声を大にして言いたいのは「死ですべてが終わるのではない」ということです。すべてを知られるイエス様は言われます。

わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。

(ヨハネ　11・25)

滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからはいって行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。

(マタイ　7・13〜14)

イエス様は十字架につき、よみがえられたことによって、私たちにまことのいのち、永遠のいのちをくださいました。私は、救い主であるイエス様を信じていることを何よりの喜びとしています。イエス様は「いのち」そのものであられ、私たちを、まことのいのちへと導いてくださるお方です。ですから私は、イエス様を宣べ伝えたいのです。

第一次世界大戦中のこと、ヴェルダンという町で激しい戦いが行なわれました。至るところに屍が転がっていました。戦場に立ち込めていた屍臭を、私は一生涯、自分の鼻の記憶から、脳裏から消し去ることはできません。「ここに、祖国のために戦った人々が眠る」と刻まれた戦争記念碑を見るたびに、私にはヴェルダンの戦場の酷い臭いがよみがえってきます。そして、あと百年もたてば、私たち自身もこの地上に生きていないと思うと、その恐ろしい死の匂いがまざまざとよみがえってくるのです。あなたはそれを感じないでしょうか?

しかし、この死の世界において、ただ一人死からよみがえった方がおられます。そしてそのお方イエス様は、私たちに次のように呼びかけておられるのです。

「わたしは生きており、あなたがたも生きるべきです。わたしを信じ、わたしのところに来なさい。わたしに立ち返りなさい。わたしのものとなりなさい。わたしはあなた方を、まことのいのちに導きます」

この呼びかけこそが、私たちの希望であり、永遠

のいのちに至る道です。暗く望みのない死に至るこの世界にあって、このように呼びかけてくださるお方、救い主イエス様なしに私たちはどのように生きていくことができるでしょうか。

最近、私はカール・ハイム教授が書き写したある古い手紙を読みました。それは第二次世界大戦のさなかにロシアで戦死した一人のクリスチャン兵士の手紙です。

「私たちの周囲の状況は惨憺たるものだ。ロシア軍がロケット砲で攻撃を始めると、皆がパニックに陥る。ただでさえ、吹雪、厳寒、飢えと凍傷という悲惨な状況なのに。でも、私には恐れはない。たとえ私が戦死したとしても、その先にはすばらしいことが待っているからだ。その時、私は栄光への第一歩を踏み出すのだ。その時私は、神である主と顔と顔を合わせて出会う。そして主の栄光の輝きが私を取り囲む。だから私はここで死ぬことになってもかまわない」。この手紙を書いた兵士は、その後戦死しました。しかし、その手紙を読んだ時、私は、「イエス様を知っていれば、若者であっても死への恐れはなくなる。それは、何とすばらしいことだろう」と思わずにはいられませんでした。

そうです。イエス様はいのちの君です。そして、イエス様のものとされた人々には、確固とした「永遠のいのちの希望」が与えられるのです。

ある時、ライプチッヒの市庁舎で、市側の責任者と教会の幹部の会議が開かれていました。長々と演説が続きましたが、その内容はお互いの立場を尊重して当たり障りのない無難なものばかりでした。その会議の終わりに、ドイツ福音教団の事務総長のハインリッヒ・ギーセン氏が立って挨拶をしました。それは、実に忘れがたい挨拶でした。「皆様。私たちはどういう人間の集まりでしょうか。もし尋ねられればどう答えればいいでしょうか。一言でいうと、私たちは次のように祈る者の集まりです。『愛する神様。私が天国に入ることができますように、あなたを信じる者にしてください』」

そう言い終わると彼は席に戻りました。そして参会者の間に、感動が広がって行きました。

三十年戦争の時に、パウル・ゲアハートは次のような詩を書きました。

「私はこの世の人生を歩んでいるが、この地上の幕屋に留まろうとは思わない。私は、天の故郷に至る私の道を歩んでいる。そこでは私の父なる神が、私を限りなく慰めてくださる」

あなたご自身もこのようにこの世を歩めることを私は心から願うものです。なぜイエス様が必要なのでしょうか？すべてはあなたご自身がイエス様を知ることにかかっているのです。

神と共に歩む人生





いつもイエス様といっしょ

酒井 千尋

今回は、主イエス様が「いつもいっしょにいてくださる」という、喜ばしいみことばを聖書から見ていきましょう。聖書にはこのお約束が多くの箇所に記されていますが、ここでは10項目に分けてご紹介します。

1「主はともにいてくださる」という約束は、主イエス様のお名前に刻まれている。

マタイの福音書には、次のようにあります。

「見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」（訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。）

（マタイ　1・23）

神のひとり子、イエス様が天から下られて、この地上に来られたとき、ご自身のお名前によって「わたしはあなたがたとともにいる」と、高らかに宣言しておられます。

2ご自身が聖書のいたるところで「わたしはあなたとともにいる」と告げておられる。

ここは二つだけ、聖書からあげておきましょう。主がヨシュアに語られた言葉。

わたしはあなたに命じたではないか。強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである。

（ヨシュア　1・9）

いまひとつは、申命記。モーセがヨシュアに言った言葉。

主ご自身があなたの先に進まれる。主があなたとともにおられる。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。恐れてはならない。おののいてはならない。

（申命記　31・8）

私たちが世にあって苦難や試練に会うとき、主は「恐れるな。わたしはあなたとともにいる」と力づけ、励ましてくださいます。私は神とともにいる。この確信こそ、なんと心強いことでしょう。私たちは胸を張り、背筋を伸ばして生きていけるのです。

3主は、心砕かれた人とともに住んでくださる。

わたしは、高く聖なる所に住み、心砕かれて、へりくだった人とともに住む。へりくだった人の霊を生かし、砕かれた人の心を生かすためである。

（イザヤ　57・15）

主は、心が打ち砕かれ、弱りはて、へりくだった人とともに住んでくださる。打ちひしがれ、痛み、疲れた人といっしょに住んでくださる。その人の霊と心を生かすために。

4私たちは、目覚めていても、眠っていても、主とともに生きている。

主が私たちのために死んでくださったのは、私たちが、目ざめていても、眠っていても、主とともに生きるためです。

（1テサロニケ　5・10）

イエス様は十字架についていのちを捨て、私たちを罪から解放し、永遠のいのちの中に導き入れてくださいました。私たちは、神の子どもとされました。ですから私たちは眠っていても、起きていても、いつも主といっしょです。主のうちに包み込まれているのです。

5みことばとなって、いっしょにいてくださる。

イエスは彼に答えられた。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちは（父なる神とイエス様）その人のところに来て、その人とともに住みます。」

（ヨハネ　14・23）

私たちは、いつも必要なときに聖書のみことばが心に浮かんできて、主が助け、みちびいてくださることを体験しています。また、そのためには、いつも耳を空のほうに向けて、耳を澄ましていることが必要ですね。そうすれば、主はいつでも私たちといっしょにいてくださいます。

6聖霊として、ともにいてくださる。

イエス様の言葉。

わたし（イエス様）は父（父である神）にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主（聖霊）がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。

（ヨハネ　14・16）

私たちがイエス様を信じたとき、イエス様のお約束にしたがって、私たちは聖霊をいただきます。聖霊もまた私たちとともに「永遠に」いてくださるのです。聖霊を一言で表せば助け主。これは実感ですね。私たちは聖霊がいっしょにおられることを「実感としてわかる」ように、神様によって変えられていきます。

7祈るときに、主はいっしょにいてくださる。

「あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」

（マタイ　18・19〜20）

二人でも三人でも集まって祈るときには、何とそ

の中にイエス様がともにいてくださるのです。そのイエス様を、あなたは「実感」して祈っておられますか？　これって考えてみるとすごいことです。こんな神様がほかにあるでしょうか。

8主はいっしょにおられるだけでなく、私たちを背負ってくださる。

あなたがたがしらがになっても、わたし（主）は背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。（イザヤ　46・4）

これも驚くべきお約束です。私たちが信じる神様は、実に、私たちを背負ってくださる神様です。考えてみると、私たちは自分では気がつかないが、「実は神様が背負って運んでくださっていた」という経験を、必ずもっているものです。

私ごとで恐縮ですが、私が腎臓ガンで手術をしたとき、手術室には主の存在、主の支え、主のご配慮が実感されました。こういう体験をしますと、イエス様への依存度、イエス様へのパイプがぐっと太くなり、イエス様とより強く結びつかせていただくことができます。イエス様を信じていて、ほんとによかった！

9主はあなたの「右に」おられる。

主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。（詩篇　16・8）

主イエス様はあなたとともにおられます。そのイエス様の立ち位置は自分のどの辺だろう、と考えたことがおありですか？　それは詩篇によると、なんと「あなたの右」です。右ということは、あなたとイエス様は「向き合っている」のではない。あなたと同じ方向を向いていてくださるのです。もっと言えば、肩を貸して支えたり、肩を抱いて押し出したりできる場所、「あなたの右」にいてくださるのです。横から後ろから、ある場合は背負って、あなたが歩くのと同じ方向に、ともに歩いて、支え、励まし、守ってくださるのです。

10しかも、永遠に。

見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。（マタイ　28・20）

このみことばの中の「世の終わりまで」と言う言葉は、「永遠」を強めるための修辞法です。神様の世は永遠ですから、世の終わりなどということはありえません。つまり永遠の永遠まで、イエス様は「あなたがたとともに」いてくださいます。また、別のところで、イエス様はくりかえし、私たちに「永遠のいのちを与える」と約束してくださっています。ですから、私たちは、いつまでも、永遠にイエス様とともにいることができるのです。私たちが永遠にイエス様といっしょにいるすばらしい状況は、黙示録22章などに示されています。以上、私たちは主が、イエス様が、「いつも、いつまでも、私たちとともにいて」くださっていることを聖書から見てきました。ですから私たちは、何の心配もなく、主イエス様に守られ、強められ、導かれ、安心して、人生を歩いていくことができます。それも永遠にです！　「いつもイエス様といっしょ」、「主はともにいてくださる」、このことを、いつも心にしっかりと持って、その恵みと喜びに感謝しながら生きていけたら幸いです。



酒井千尋　一九三三年生まれ。芸大中退、早大卒。帝人、イーモリアーツ、オークテクノロジーで企画、編集、ライター。

主のあわれみと、豊かな恵み

久保 和子



2009年10月のスイスキャンプ



2010年8月御代田ロングキャンプ、後列左から4人目、久保和子さん

私は、一九四四年に新潟市で生まれました。終戦後、父の勤めていた役所はGHQによって解体となり、新しい制度の下に、地方公務員となった父に伴って、私たちは大阪に引越し、そこで育ちました。

両親は私と妹をこよなく愛してくれ、目に入れても痛くないほどにかわいがってくれました。私は、厳しさと優しさを併せ持った父を尊敬していました。幼いころは、着流し姿で散歩する父の着物の袂に手を入れて、一緒について歩いたものでした。歩きながら、父はいろんなことを教えてくれました。私は幼い頃から、自分の中にある、どうしようもない罪の性質に気づいていました。かなりひどいわがままでした。高校生の時、当時大好きで、足しげく通っていた奈良のあるお寺の仏像のことで、「この方のお顔を見ていると、私のわがままを赦していただけるような気がする」と日記に書いています。

大学四年生の二十一歳の春、初めてお見合いをし、すぐに婚約、一年後、二十二歳で結婚しました。夫は誠実で優しく、大きな包容力のある人でした。予定していた結婚式の少し前に、アメリカへの転勤が決まり、式の日取りを早めて挙げ、一ヶ月共に暮らした後、彼は研修先のシカゴへ旅立ちました。一九六六年のことです。半年後、彼はニューヨーク勤務となりました。夫の渡米後一年して、私は夫のもとへ行きました。私がニューヨークへ着いてまもなくの頃、夫が唐突に、「僕はもう少しでクリスチャンになるところだったんだ。クリスチャンは死ぬことを恐れていないんだよ」と言ったことがありました。その言葉はその後すっかり忘れていましたが、それから二十二年の歳月が流れて、夫が五十歳の若さで過労死したとき、仏式の葬儀の席で、急にあの時の夫の言葉が頭に浮かんできて、「ああ、主人はクリスチャンになりたかったのかもしれないのに、どうしてあんなに大切なことをちゃんと話し合っておか

なかったのだろう」と悔やまれてなりませんでした。そして、落ち着いたら、このことを誰かに相談しようと思いました。

私たちの結婚生活のちょうど半分は、海外に住みましたが、最後の任地であったオランダのアムステルダムから先に単身で帰国した夫は急激な環境の変化もあって、過労と不眠で心身のバランスを崩してしまったようでした。私と三男とは学校のことで一ケ月おくれて帰国することにしていましたが、その帰国予定日の一週間前に夫は自ら命を絶ってしまいました。日本からの早朝の電話で、そのことを知らされました。それでも、ショックでへたり込んでしまうこともなく、一時間ほどで荷物をまとめ、スキポール空港からロンドン経由で帰途につきました。フライトの間中、一言も口を利かず、十四歳の三男の手をしっかり握っていたのを思い出します。

葬儀や法事などが終わり、子供たちの学校も始まってすべてが落ち着いてくると、私はこの責任はすべて私にあると自責の念にかられるようになりました。それは誰の目にも明らかなことでした。ですから、周りの者たちは、私が自分を責めないように気遣ってくれていました。特に夫の両親や、弟、妹たちは、細心の心遣いを示してくれ、妹の一人は「お兄さんを赦してあげてね」などと言ってくれました。でも、私自身は自分で自分を赦すことができず、主人がくたくたになって疲れて眠れない日々を過ごしていたことを思うと、自分が生きていることも申し訳なく、かといって、子供たちや親のことを思うと死ぬこともできず、またその勇気もなく、悶々とした日々を過ごしていました。ただもうしばらく、子供たちが全員成人するまで頑張ろうと思って、日々の食事作りなどを黙々としていました。そんな中でも、子供たちの笑い声が絶えなかったのは大きな慰めでした。

そのうち、まだ四十四歳の若さだったせいか、立ち直りも早く、だんだん力が戻ってきました。まだ人生半ばなのだから生きがいを見つけて、残りの半生を有意義に暮らそうという前向きな思いになってきました。家にいるとろくなことを考えないから、外に出たほうが良いという周りの勧めで、駅前の英会話学校で教えることにしました。私の社会復帰の第一歩でした。こうしているうちに私は生きていくことに、自信が持てるようになって来ました。けれども、時折ふと襲ってくる罪の意識が私を苦しめました。まだ解決できていない問題がありました。いつもならあっさり赦してくれ、私を決してとがめない夫がもうこの世にいない、ということは、私は永久に赦されないということであり、私はその重荷を一生抱えて生きていかなければならないということでした。そんなとき、我が家の本箱に一冊の本を見つけました。それより遡って六年程前、友人の家で、あるドイツ人にいただいた本でした。パラパラとめくっていくうちに、次の聖書のみことばに目がとまりました。

子よ。しっかりしなさい。あなたの罪は赦された。
（マタイ　9・2）

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。
（マタイ　11・28）

とても不思議な言葉だなと思いました。人間の言葉じゃないような響きで、一体何の権威があって、こんなことが言えるのかしらと思いました。これがきっかけとなって、聖書の入門書、解説書を読み漁りました。聖書の中に私の求めているものがありそうでした。その当時、何人かのクリスチャンの友人、知人に手紙を書きました。「私には一筋の光が見え

てきたような気がします」とか、「聖書に惹かれています」などと書いた記憶があります。でも私を教会に誘ってくださる人はありませんでした。たぶん、その方々自身に、確信がなかったのだろうと思います。それで、一人で聖書の勉強をしていれば十分だと思っていました。その頃の私は、聖書という心の拠り所を得て、もう一頑張りしようという心境でした。しょっちゅう私の安否を尋ねて電話をしてくれた妹に、「私は聖書で生きていけるような気がする」と言ったりしていました。

それを聞いた妹の親友が「光よあれ　第4集」を送ってくださって、集会の姉妹を紹介してくださいました。その姉妹は「さっそく祈ります」と言って、吉祥寺集会の礼拝に連れて行ってくださいました。主人の死から二年近く経った一九九〇年三月のことでした。その日のベック兄のメッセージにも「すべて疲れた人・・・」のみことばが引用されていました。その後十日程して、八王子家庭集会で、ベック兄から個人的に福音をお聞きしました。涙と鼻水でぐしょぐしょになって、ベック兄に何もかも打ち明けていました。ベック兄は、「それは、和子のせいでもないし、ご主人のせいでもないよ。イエス様のせいだよ。一番ひどいのは神様だよ。何しろ、神様はイエス様を十字架にかけたのだからね」とおっしゃいました。キリスト教入門書から学んだ知識ではとても理解しがたい言葉でした。「主人に天国で会えるでしょうか」と聞くと、ちょっと間をおいて、「うん。きっと会えると思う」ときっぱり答えてくださいましたが、私自身は本当だろうかと思っていました。それから二ヶ月して、ベック兄の勧めで、受洗しました。本当に生まれ変わったような、さわやかな、これまでに経験したことのない幸福感でいっぱいでした。生まれて初めて両親にも相談せず、自分で決断したことでした。

受洗した前の週、アメリカから若い女の先生が、私の勤めていた英会話学校に赴任してきていました。クリスチャンだというので、私が受洗したことを言うと、とても喜んでくれ、自分のために持ってきていた、オランダ人コーリー・テンブームの「主のための放浪者」という本を貸してくれました。食事の時間も惜しんで夢中で読みました。少し前までオランダに住んでいて、アンネ・フランクの家などにも何度か行ったことがあったので、とても身近に感じられ、感動はひとしおでした。イエス様は、主の民であるユダヤ人を救出するために、家族総出で、命の危険も顧みず働いたこのような立派な人々にでさえも、こんなむごいことを許される。それでもこの人々は主に対するゆるがない確信を持ち続けている。このことは、クリスチャンに対する私の先入観を根底から覆すものでした。

このアメリカ人は三年位の契約で来たはずでしたが、半年後のクリスマス前に突然帰国してしまいました。私にオズワルド・チェンバースのデボーションの本を残していってくれました。この当時、私の身辺には、このように急にクリスチャンが何人も現れました。今思えば不思議な出会いがいくつかありました。

この頃の私は集会に集いながら、もっと、やりがいのある仕事をまだ探していました。そして、あるアメリカの大学の日本校の非常勤講師として勤めることになりました。能力も経験もない私にそんな仕事が与えられたのも当時の不思議のひとつです。その通勤のために車を買いました。夫がいないのに、車を持つなんて考えられないことでしたが、それだけ私は強くされていました。片道一時間のドライブの間に、ベック兄の黙示録のメッセージテープを往復で二回聞き、五十三巻のテープを全部聞きました。

この仕事に就いたのはこのためだったと思ってい

ます。その内容は私にとっては非常な驚きであり、うれしいものでした。これからこんなことが起こるなら、本当に救われて良かったと思いました。夫が召されたことも、私たちが苦しんだことも、主が私たちを愛してくださるゆえに起されたことだと思えるようになってきました。真理を知る喜びは何物にも代えられないものとなりました。

私は息子たちが、父親の死を恥ずかしいことと思うのではなく、しっかり主から受けとって欲しいと願いました。そのためには、イエス様を知る喜びを自分のものにして欲しいと、彼らを強引に集会に連れ出しました。御代田のキャンプにもよく共に集いました。十八年前のこのセンターの献堂式にもそろって参列しました。その翌年、主人の遺骨をお寺から出して、ここの納骨堂に納めていただきました。そのときの証しの中で、「主人は未信者でしたが、その死を通して、私たちは神様に出会い・・・」と言いましたら、あとでベック兄に呼び止められ、「あなたは間違ってるよ。ご主人は未信者じゃなかったよ。主はね、自分はもう駄目だと思った者を決して捨てないよ。主は止めようと思ったら止められたよ」と言われました。「ああ、やっぱり。主人が天国にいることは本当だったんだ」と思う一方、「どうして主人をご存じないベック兄にそんなことがわかるのだろう。でも本当でなかったら、わざわざそんなことをおっしゃる必要はないのだし」などと思っていました。とにかく、そのことで、ベック兄から主の愛が伝わってきて胸が熱くなりました。

主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。（詩篇 34・18）

このみことばにその根拠があることを今は知っています。この出来事はその後の私の歩みをどんなに

勇気づけてくれたかしれません。

その後、もっと集会に集ってイエス様のことを知りたい、祈り会にも出席したい、と思って仕事をやめ、ちょうどその頃から始まった海外キャンプにも次々と参加しました。はじめてのドイツキャンプでは、主のご臨在の中で、兄弟姉妹と共にいる楽しさ、うれしさを経験しました。家族で行ったことのあるローテンブルグや黒い森を訪ねても悲しい気持ちはなく、自分がすっかり新しい者になっているのだということを改めて知りました。その後、昔住んだことのある、懐かしいニューヨークやトロントへもキャンプで行きました。幸せな日々を過ごしたそれらの土地を訪ねても、今の自分があの頃より、はるかに幸せだと実感したことでした。

仕事をやめて、集会に好きなだけ集えるようになり、姉妹方と共に祈り、この世から切り離されたようになってやっと、私は主人の死についても証しができるようになりました。また、すべてのことを主に感謝できるようになり、解放感を味わうようになりました。兄弟姉妹との交わりの中に身を置くことが最も安全なことなのだと知るようになりました。

この証しの始めにお話しました、ニューヨークで私の夫が言った言葉の謎は、その後四十年経って解けました。古い、夫からの手紙の束の中から、そのことが詳しく書かれているものが見つかったのです。夫は、シカゴでアメリカの銀行に研修生として入っていたのですが、指導をしてくださっていたブラウンさんという、とても敬虔なクリスチャンとその方の教会の宣教師から、熱心に伝道されていたのでした。あるときなどは、四時間にわたって、聖書と格闘することになり、主要なところを全部読んだそうで、そのときいただいた聖書も見つかりました。夫は長男でもあり、自分はクリスチャンにはなれないと思い込んでいたようで、自分がアメリカ人なら受

け入れていただろうと書いています。涙をもって勧めてくださったブラウンさんたちを失望させてしまったことを申し訳なく思っていたようです。

そして、その手紙の中で「僕たちは自分たちの信仰のことを真剣に考えなければならない。はっきりした考えを持たなければならない。君の信仰観を聞きたい」と書いています。当時夫は二十八歳、私は二十二歳でした。前途洋洋たる人生の海原に船出したばかり、海面は穏やかでキラキラと輝いて見え、私は信仰について考えるには、余りにもこの世のことにしか関心のない幼い者でした。このブラウンさんたちは、きっと、この遠く日本からやってきた若者とその妻のことを哀れに思って、祈っていてくださったことでしょう。

今年、六十六歳の誕生日を迎えたとき、おもしろいことに気づきました。私の人生を振り返ってみると、きれいに三つに分かれているのです。それぞれ二十二年ずつです。始めの二十二年間は両親の愛情のもとでの幸せな日々でした。その次の二十二年間は、優しい夫と三人の息子と共に過ごした、この世的には恵まれた年月でした。そして、イエス様に出会ってから今日までのこの二十二年間は、あの大きな試練にもかかわらず、それまでとは比べ物にならないほどすばらしいものとなりました。それは、魂の救いというかけがいのないものをいただき、サタンの支配する「この世」から救い出されたからです。思えば、私の前半生はこの世的には幸福と見えたことでしょうが、実際は高ぶりと欲に満ちた、平安からは程遠いものでした。すさまじいばかりの自我との戦いをひとりで戦わなければならなかったのです。今、私は新しいいのちを与えられ、自分の数々の罪は赦され、主に受け入れられています。また良きことのできない私に代わって、主がすべてをしてくださいます。優しかった父や夫と比べても、比較にならない程すばらしい、何でもおできになるイエス様がいつもともにいて、守り導いてくださり、また祈りを聞いてくださり、心の奥底に平安を与えてくださっています。幼い頃、父の着物の袂に手を入れて歩いたように、私は天のお父様にすがって歩いていくだけです。主は私にとって、すべてのすべてとなってくださいます。

さて、これから先の、次の二十二年間はと考えると、老いていく身を思って少し不安がよぎりますが、きっと、そのことは心配する必要がないのでしょう。もうまもなく主は来られ、私たちを天に引き上げてくださることでしょう。救われて以来、私の唯一の希望は主のご再臨です。最近めっきり老いが目立つようになった母、妹とその家族、この世で労苦している息子たちとその家族、主人の弟妹たちとその家族など、私に関するすべてのことを主はその日までに完成させてくださる、と信じて祈っていきたいと思っています。

神にとって不可能なことは一つもありません。
（ルカ　1・37）

それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。
（マタイ　19・26）

それゆえ、主はあなたがたに恵もうと待っておられ、あなたがたをあわれもうと立ち上がられる。主は正義の神であるからだ。幸いなことよ。主を待ち望むすべての者は。
（イザヤ　30・18）

頑なで、一筋縄ではいかない私たち家族のことを、忍耐強く導き続けてくださっています主に心から感謝いたします。

人生の最大の危機にあって、主はその両腕で抱き

かかえて私をその試練に耐えられるように、力を与え、そこから脱出させてくださいました。詩篇23篇にあるように、主は、私を緑の牧場、憩いの水のほとりに導いてくださいました。これから先、どんなことが私を待っているかわかりませんが、あの暗闇の中で私を支えてくださった主が、必ず、どんなときにも私と共にいて力づけ、すべてのことを最善に導いてくださるに違いないと確信しています。

私は、
主の恵みと、主の奇しいみわざをほめ歌おう。
主が私たちに報いてくださった
すべての事について、
そのあわれみと、豊かな恵みによって
報いてくださったイスラエルの家への
豊かないつくしみについて。
彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、
ご自身の使いが彼らを救った。
その愛とあわれみによって主は彼らを贖い。
昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。
（イザヤ　63・7、9）

新潟市生まれ
大阪市立晴明が丘小学校　帝塚山学院中学部　高等部　甲南大学文学部卒



久保和子

わたしの変わらぬ愛はあなたから離れない

平　正明



妻の由美さんと



次女の亜希子さんと

私は一九七四年に就職のために神戸から東京へ引っ越しました。三年後に学生時代からつきあっていた妻と結婚し、その翌年に母が亡くなりました。その頃勤めていた会社は三年の間に崩壊に向かっていました。母の死を通して、自分の人生は自分の思いどおりにならない、虚しいものだということを体験しました。結婚は親の反対を押し切ってしたものでした。二人でやって行こう、ミカン箱一つでもいいからやって行こう、と思いたったのですが、結果は失望でした。同じように苦しんでいた妻は吉祥寺集会に導きだされ、二年後に洗礼へと導かれました。そして私も妻が救われてから三年後に受洗の恵みに預かりました。

問もなく、仕事の関係で広島に転居しました。広島ではどのように礼拝したらいいのですか、とベック兄に尋ねたところ、二人で家庭礼拝をはじめなさいと言われました。転居してすぐに田中姉妹と三人で礼拝が始まりました。

その頃私は仕事に没頭していたのですが、二日間の休みをいただいて妻が生まれ育った因島へ出掛けたことがありました。三番目の子どもの勇輝の三歳の誕生日だったのですが、勇輝はその日におぼれました。私は、何がなんだかわからないまま勇輝を海から救いあげて人工呼吸をしました。そのとき初めて私は「イエス様！助けて下さい」と必死に祈りました。瞬間のことだったのでしょうが長い時間に感じました。勇輝は息を吹き返しました。水を吐き出し泣き始めました。そのとき本当に「イエス様心から有難うございます」という思いと共に、息子勇輝は祈りの答えとして生まれて来たことを思い出し、ただ生きているだけでいいと思わされました。このことを通して主は、仕事ではなく、主が中心であるべきことを教えてくださいました。

そうして三年が過ぎ、妻と「やっと広島に慣れ

てきたね」と言ったとたんに東京へ転勤となりました。

広島での小さな集会に慣れていた私は、吉祥寺集会の人の多さに圧倒されました。本社での仕事は、人を蹴落としていくような部署で、戸惑いました。また、その頃はバブルのさなかで会社には享楽が蔓延していました。私は元々遊び好きな者ですから、そこにはまり込んでいきました。行った当初は、自分ひとり違うな、また自分は違っていていい、とも思っていました。しかし、後輩が自分の上になるとあせりを感じ、遅れを取り戻そうとして、共に遊び共に飲む生活を始めました。

吉祥寺集会に再び集うようになったのですが、私は日曜日だけの「サンデークリスチャン」でした。表面的にはニコニコしながら心は完全に離れていました。麻雀や遊興酩酊でお金を使い、女性問題で姦淫の罪を犯しました。そしてその間、日曜学校の先生、春日部集会のお手伝いを始めていました。心の中はもうグチャグチャで、ただ表面だけ装っていたのです。ところがある日、日曜学校の子供達に御言葉を伝えているのに誰も私の顔を見ていないのに気づきました。子どもたちが、主から心の離れている者の言葉をきくはずがありません。本当にどうしようもなくなりました。借金を重ね、この世の栄華を極めようと思っていたことが突然空しくなり、解放されたいという思いが与えられました。一番困ったのはこのことを妻にどうやって打ち明けようかということでした。信仰において妻が一番怖かったのです。妻を傷つけたくない、愛しているつもりなのに、クリスチャンなのに、救われているのに・・・と自己憐憫に陥りました。ある兄弟に相談したら、それは打ち明けるべきであると言われ、妻に打ち明けました。それによって私自身の心は軽くなりましたが、妻は打ちのめされました。そして私の父と妻の父に借金のかたがわりをお願いに行きました。私の実家は、私たちが救われて母の三回忌のときに仏壇を拝まないということで出入り禁止になっていました。父からは、「勝手なときだけ来やがって。変な宗教に入るとこうなるのだ」と言われました。義理の父は「これぐらいなら」と貸してくださいました。ただこのとき、家族・親族の救いがまた遠のいた、と思いました。

私は集会に対しても、全ての兄弟に対しても罪を犯した者であり、悔い改めてどこか集会の片隅にでも置いて頂き、歩ませていただきたいという思いでした。そのころ、色々と相談にのって頂いていた兄弟から「奥さんの心の痛みがあなたに本当にわかりますか」、また「悔い改めは主から来る」ということを言われました。そのときははっきりとはわかっていませんでしたが、その当時の私は反省しただけで悔い改めていなかったことが後でわかりました。

そして、一年後に富山に転勤となりました。私は単身赴任をしようと思いましたが、「あなたみたいな人を一人で放っておくわけには行かない」と妻に言われました。また、北陸地方の人々のたましいの救いに重荷を負っておられた兄弟から、「家庭を開放されたらどうですか」というお話がありました。また罪を犯すのではないかという思いもあり、私のようなものにはできませんと申し上げました。しかし、兄弟が最後に言って下さったのは、「集会は主のものです。主が建てられるものです。あなたの力は何もいらない。全てを主に頼ってされたら何も問題ないですよ」ということでした。こうして、十人ぐらいの家庭礼拝が始まりました。初めの頃は四軒の家を回りながら祈り会もしていました。その後五年が過ぎて私は仕事に疲れ、人員整理のための希望

退職に手をあげて会社を辞めることにしました。辞めて一年後に富山で元の仕事に関係した会社に勤めました。

富山で、駅から近い所に私の思いでマンションを買って集会を開いていました。ところが私は仕事に逃げて、集会は妻に押し付けていました。初めの頃は特に仕事にかまけて、年に数回しか献金の記録をつけていなかったので、何年も経過すると自分でも帳簿がよくわからなくなっていました。その頃、会計の奉仕を他の人に交替してもらいなさいという話がありましたが、交替すべき方が毎週来られるわけではなかったので、私はそんな無責任なことは出来ないと言い張ったのです。後になって、これは自分の正しさを主張して主の権威に従わない罪だと知りました。会計を全部吟味していただいたところ、私のずさんささから結果的に不正をしていたことが明らかになりました。ある兄弟から、「ただ唯一の権威のある主なる神様のその権威に従いなさい。その権威を与えられた者の言葉に従いなさい。何の言い訳も、何の言葉も返してはならない。人はだませてもあなたのしていることはすべて主がご存知である。そして迷惑をかけた兄弟姉妹方に謝りなさい」と言われました。同時にその兄弟は、「みんな事情をわかっていて悔い改めるのを待っている」とも言われました。そのとき、私のしてきたことのすべてが主の目には悪であることを知りました。多くの恵みを与えられながら主に背き、主を否んだ者を、悔い改めるようにと、主は全ての罪を明るみに出して下さいました。

その間に妻は体をいためました。私が兄弟として果たすべき責任を果たさず、重荷を妻に押し付けた結果であることは明らかでした。私は、妻の回復とともに自己の本当の悔い改めを祈り始めました。妻には光の中を歩んでもらいたい、そのためにも喜びの集い、家庭集会、海外の喜びの集いに出来るだけ参加できるように祈りました。妻はドイツのキャンプに毎回参加し、私も忙しい中ときどき参加しております。

二〇〇六年の大阪の喜びの集いに妻と二人で参加しました。私の罪が赦されているのか、本当に悔い改めたのかもわからない状況でしたが、イエス様から御言葉を頂きました。それは妻がドイツでベック兄に撮って頂いた写真に書き添えられていた御言葉です。「たとい山々が移り、丘が動いても、わたしの変わらぬ愛はあなたから移らず、わたしの平和の契約は動かない。」(イザヤ　54・10)とあり、その横に妻のにっこりした顔が映っていました。そのとき私は自分の罪のためにイエス様が十字架に架かって下さり、死んでよみがえって下さったことを実感しました。主の御愛を知りました。本当に感謝でした。

あなたには、すべてができること。あなたは、どんな計画も成し遂げられることを、私は知りました。知識もなくて、摂理をおおい隠した者は、だれでしょう。まことに、私は、自分で悟りえないことを告げました。どうか聞いてください。私が申し上げます。私はあなたにお尋ねします。私にお示しください。私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。

(ヨブ　42・2〜6)

妻がどうしても祈れないと苦しんでいたとき、一緒に祈ればいいと示され、祈り始めました。私は救われてからも真剣に聖書を読んだことがなく、お祈りも義務的にしていたのですが、それを境に変えられました。今は与えられる御言葉が嬉しく、また祈り始めて以来、多くのことが動かされてきています。

平正明

親族の救いを第一に祈ってきましたが、妻の両親が救われました。私の勤めている会社もガタガタになってきているときにオーナー社長が突然亡くなり、責任者を引き受けるようにと言われましたが、妻は絶対反対でした。でも私は管理人として、共に働く従業員の救いを祈るのが仕事だとわかり、お引き受けしました。恵みなのは、祈っている相手の方々と交わるチャンスを与えられていることです。私は今まで本気で祈ったことのないような者でしたが、主の憐れみによって守られ、恵みをたくさん頂いています。祈る喜びと祈れる恵み、祈る武器を与えられ感謝しています。

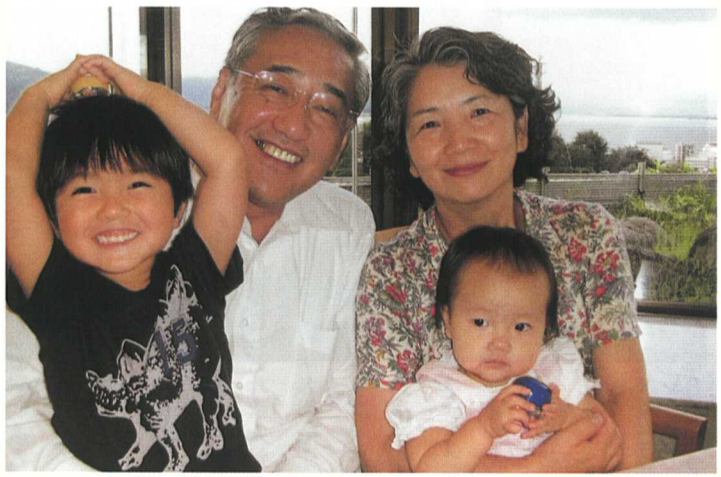
私のような者でさえ救われたのですから、全ての人が救われ、必ず共に祈る者になることを確信しています。集会の二十四時間の祈りの輪を通して兄弟姉妹と繋がっているという体験をさせていただいていることは感謝です。唯一の権威である主なる神様、イエス様の命令に聞き従うことに関しては、「だけど」ということばはつけてはならない、と固く思っています。御心が天で行われるようにこの地上でも主の御心だけがなるように祈っています。救われた恵みを喜び感謝して、この恵みと喜びを多くの方々にお伝えしたいと思っています。そのためにも主に清めていただき、こんな者ですがお用いになって下さいと祈っています。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことについて感謝しなさい。（1テサロニケ　5・16）

死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしは、あなたにいのちの冠を与えよう。

（黙示　2・20）

一九五一年神戸市青木生まれ
神戸市立本庄小・中卒　兵庫県立芦屋高校卒　甲南大学卒　安宅産業（株）、伊藤忠商事（株）を経て、現在、笹井鋼建（株）・丹羽商店（株）・岩瀬工業（株）代表取締役
妻・由美、長女・小池久美子、次女・亜希子、長男・勇輝



お孫さんたちと

平正明

とこしえの道に導いてください

平　由美



夫の正明さんと

私が救われたのは今から三十二年前です。救いのきっかけになったのは結婚生活でした。両親に反対されましたが、不思議なことに両方共通の知り合いの方が頼みもしないのに中に入ってくださり結婚にいたりました。好きな人と結婚できたら幸せで楽しい生活が待っていると思っていました。ところが我儘で、幸せにして欲しいと思っていた私ですからうまくいくはずがありません。不平不満で、夫に要求ばかりしていました。

そんな頃、近所の人たちが車に乗って教会のケーキのクラスに出掛けようとしているところに出会い、「私も連れっていって」と無理やり頼んで連れていってもらいました。それが吉祥寺集会でした。

そのときのことは今でも鮮明に覚えています。扉を開けたとたんに別世界が待っていました。不満を持っている私に対して、穏やかで、明るくみんな笑顔で喜びと感謝に満ちあふれていました。ほっとする暖かい空間でした。思わず「私も喜びと希望にみたされたい」と言ったら、「ベック兄とあの部屋へどうぞ」と言われました。あの部屋に入ったらどうして感謝できるようになるのだろうと思いつつ入りました。そこで聞いたことは、私の罪のために二千年前にイエス様が十字架につき死んでくださったこと、神様から離れていることが罪であるということで、びっくりしました。ミッションスクールに行っていたのに、私の罪のためにイエス様が十字架につけられた、ということを教えてくれた人はありませんでした。イエス様は、こんな劣等感の強いわがままな私を赦し、愛してくださっていると知り、うれしくてたまらなくなりました。

私はそのとき、日曜日の礼拝のことも、聖書を読んでお祈りすることも、信仰がなんであるかもまったく知りませんでした。

その後、夫は母の死と会社の倒産を通して救われ

ました。夫がベック兄と交わっている間、私は夫の救いを祈っていました。しかし、夫のことを祈っているうちに、自分の悔い改めへと導かれ、二重の喜びとなりました。

夫は救われたのですが、死にたいと言ってみたり、また夜中に眠れないで座っている夫の姿を何度も見るようになりました。おかしいなと思っていましたが、その原因は女性問題と借金だとわかりました。とうてい考えられない出来事でした。ハンマーで頭の後ろからなぐられ、粉々に飛び散った気がしました。その後の一週間のことはまったく覚えていません。子どもがなにを食べ、どうやって学校へ行ったのかもわかりませんでした。

夫から自分の罪を聞かされても、私には離婚する気はまったくなく、やりなおそうと思っていました。でも子どもの鋭い一言に絶望し、死のうと思いました。家の近くの公園に行き池に飛び込もうとしたけれど、泳げなくて怖いし、電車に飛び込む勇気もないし、凍えて死のうと思って座り込みました。何時間かたったとき、御言葉が心に浮かんできました。

私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。私の助けは、天地を造られた主から来る。

（詩編　121・1〜2）

天地を造られた主が助けてくださるなら大丈夫と思い、家に帰りました。このときのことをミンヘン姉妹にお話したところ、「どうして泣くのですか。それはあなたの祈りの答えでしょう。お金のないことはいいことです。あなたの子ども達はよく育ちます」と言っていただき、涙が引っ込みました。

そして、ある弁護士の兄弟と話したとき、「もしイエス様が、１００％あなたが悪い、と言われたらどうしますか？」と聞かれました。私はそのとき、

私は夫を裁き、私の期待通りになって欲しいと主張し、また目や態度でそれを現わし、夫の居場所をなくしていたことに思い至り、「私とイエス様との関係において私はあやまらなければなりません」と言いました。するとその兄弟は、「夫婦が二人でやり直したいと祈っていくのなら、何億の借金があっても大丈夫。問題はない。引き受けるから安心しなさい。兄弟の命が何百万で救えたのだから喜びなさい。安いものだよ」と言われ、本当にそうだと思わされました。相手が悪いと思っている間は、苦しくて苦しくて平安がありませんでしたが、自分が悪いと思うと落ち着きました。

これらの出来事を通して夫婦が一致して歩む大切さを知りました。私たちの思いとは別に、子ども達はこのときのことを「お父さんはお母さんに一生借りができた」と言っていましたが、そうではありませんでした。

この後、夫の転勤に伴って富山へ引っ越し、家で礼拝が始まりました。初めはたくさんの兄弟姉妹が泊まりにきてくださり、交わっている夫の姿を見るのがうれしくて喜んでいましたが、本当の意味で恵みの中を歩んでなかった私には次第に負担となっていきました。年数を経るにつれて心はかたくなになり、また律法的になっていきました。子供たちの受験、就職と続き、夫は忙しく、私も仕事をしていて、家族の中の誰一人として余裕がない状態で過ごしていました。私は、不毛の荒野のようなときを何年かすごしました。しかしそのときは、私はよかれと思って一生懸命頑張っているつもりでした。後になって次女から「私の青春を返して」と言われました。あまりの辛さに、「主よ。これはどういうことなのでしょう」と祈ると、次の御言葉が心にとまりました。

「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。とげ

のついた棒をけるのは、あなたにとって痛いことだ。」

私が「主よ。あなたはどなたですか。」と言いますと、主がこう言われました。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」（使徒　26・14～15）

これだけ頑張っているのに、私が迫害しているとはどういうことだろうかと思いましたが、このときはわけがわかりませんでした。

そうこうしているうちに、二〇〇二年一月に風邪気味でベッドに横になった途端、頭の天辺から足の先まで体をシュシュシュシュと風が凄い勢いで通り抜けた気がしました。サタンが私の体を通り抜けたと思い、恐怖心で一杯になりました。それからは、食べられなくなり、また寝られなくなりました。神経も過敏になり、ちょっとした物音も気になり恐怖心に襲われていました。そして、御言葉さえも、自分が責められているようで怖く思われる時期もありました。なんのために生きているのかもわからず、なんの喜びも希望もなく、途方に暮れました。

あるとき、眠るための薬を貰いに精神科へ行きました。病んでいる人の中で何時間も待たされる内に、クリスチャンである私がなぜこんなことになってしまうのだろう、と思いました。イエス様に「怖いです。助けてください」と祈りました。診察室のドアを開けた途端に、「先生、私はクリスチャンです」と言っていました。先生は笑って「神様は愛です。裁いてどうするのですか。天国で楽しむだけでなく、生きている内にそれを味わわなければ」と言われました。私が、「先生はクリスチャンですか」と聞くと、「違います」と言われ、「ではどうしてそれがわかるのですか」と聞くと、「人を攻めたり、裁いたりすると、人は病みます」と言われました。人は裁いたり憎んだりすることで、自分を滅ぼすことを知りました。「あなたは、どつぼに、はまったので

す」と言われたときに、すべてのことの背後に主がおられることがわかりました。その頃から、詩篇139篇23～24節のみことばで、「神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください」と祈り始めました。そして、「わたしはあなたを贖った主である」という御言葉を頂きました。

夫は、病気が怖くて夫にすがりつこうとする私に、そのつど「頼るべき方は僕じゃない。イエス様だ」とも、また「生きているだけでいい。十年の間に体を壊したなら十年経てば必ず直るし、祈るから大丈夫」と言い続けてくれました。このような言葉を夫から聞くなどとは思ってもいませんでした。このことから、こんなに長い間つれそっていても、本当はこの人のことをなにも知らなかったのだと思わされました。また夫は、「ただ一つ頼みがある。僕のありのままの姿を認めてほしい。イエス様は僕の罪を赦してくれて、ありのままの僕を愛してくださっているのだから、由美もそうしてほしい。僕は口べたで由美の思うような人間にはなれない。集会の隅にいるだけでいい。一緒にそこで立っていてくれ。目立ちたがりの由美には嫌だろうがそうしてほしい」と言いました。私は、「自分の力ではそのようにすることはできませんが、聖霊さまを通して祈ってやっていきます」と答えました。

病気になってから半月近く、私の心の中から罪の泡がプクプク出てくるかのように、父の写真を見ては、ひどい言葉をあのとき言ってごめんなさいと思わされ、いろいろな光景が浮かんでは罪を知らせられ、ごめんなさいと言い続けていました。このときイエス様に、「こんな私でごめんなさい。でも主よ。私のわがままでどうしようもない罪のために十字架にかかってくださってありがとうございます」と心

から思わされるようになりました。

苦しみの中で主の愛を感じる一方で、現実の私の状況は変わらず、痛みとの戦いの日々でした。頭だけでなく耳・首・肩・胃も痛いうえに耳鳴りもひどく、朝起きると絶望的でした。痛みがある限度を超えると絶望の淵に落ちて、いつまでこの状態が続くのだろうかと落ち込む日々でした。そしてこんな状況だからこそ、聖書を読まなくては、祈らなければと思うのですが、あまりに痛みがひどく読みたくても読めない、祈りたくても祈れないという現実に押しつぶされ、どうしていいかわからずベック兄の所へ何度もお交わりを求めて行きました。そのとき「由美が祈れないなら、イエス様が祈ってくださるから大丈夫」と言われました。次の御言葉を頂きました。

私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。（2コリント　4・8〜10）

ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目に留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。（2コリント　4・16〜18）

私が調子をくずしてから、父と母が救いに導かれました。

私は母とは表面上うまく繕っていましたが、強くて支配的な母に心を閉ざしていました。

母はアルツハイマーになって、「あなたは私の方を見てない。私を見てない」と何度も言うのでした。そんな母に対してごまかしようがなく、その都度「私には母を愛することはできません。こんな私を憐れんでください」と祈りました。その後、母が寝たきりになったとき「今まで愛せなくて、心を閉ざしてごめんなさい」とお祈りしました。母は救われ、母に会った人はみな「穏やかになったねえ」と言っていました。『主の聖なる戒め』の本を読んで示され、母のそばで、「親のいうことを聞かないで結婚してごめんなさい。父と母を敬っていませんでした。ごめんなさい」と祈りました。母は涙をうかべていました。母のアルツハイマーを通して、主は父にも語りかけてくださいました。父は、母がはっきりと変わった姿を見、また自身はどんなに頑張っても母のアルツハイマーに対して無力であることに気づかされ、イエス様を信じる者となりました。うれしい両親の救いでした。

神様は、祈れないという私の嘆きに、夫を通して答えてくださいました。単身赴任で東京にいる夫から、朝起こしてあげるから一緒に祈ろうと言われ、富山と東京に離れてはいたのですが、通話料無料の携帯電話を買って祈り始めました。初めは短かった祈りが段々と長くなり、『日々の光』だけでなく聖書も読むようになりました。耳から聞く御言葉は心地よく、しっかりと入ってきて平安になります。体調が悪く感じられる日も、夫と祈ると不思議に力が与えられます。祈り始めてから、夫と離れていてもまったく距離を感じなくなりました。

家族のこと、会社の人のこと、友人、母の入っている施設の人のこと、どんどんと祈りが広がり、祈っ

ているとその人たちと交わりが与えられ、ますます祈ろうと思わされ、聖書を読むのも祈るのも楽しいです。

祈り始めてから、夫の会社の社長が亡くなり、夫は、後継者として潰れそうな小さな会社の責任を任されました。厳しい状況の中にありますが、仕事のことや社員の救いを共に祈っています。他の人からすると、私は痛くて苦しいし、夫も会社が潰れそうで大変な状況ですがとても幸せです。

今年になって夫が、「親族のことは祈ってきたし、みんな高齢になってきているから、喜びの集いに参加して、その近くの親族を訪問しよう」と言いだしました。そして、二人で聖書を読み進めているうちに、「安心して行きなさい。あなたがたのしている旅は、主が認めておられます。（士師　18・6）」の御言葉が与えられました。七月の初めにベック兄が沖縄にメッセージに行かれると聞き、北九州、長崎と訪ね、沖縄に行きました。翌週、倉敷の喜びの集いのときに病気で入院している叔父の所へも行きました。

主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。

（2コリント　12・9）

私はこの御言葉にすがってきましたし、よく知っていました。でも最後の一行、「むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう」、にたどり着くのに八年半かかりました。人の絶望は、主のいのちが現わされるための希望であることを知らせて頂き、私の弱さを誇ろうと思います。

イエス様は私達夫婦に、夫の女性問題・借金・富

山での苦しみ・病気と色々なところを通されましたが、あなたがたを満たすのはこの「わたし」だと教えてくださり、心を一つにして祈る者へと変えてくださいました。どんなに愚かでも、どんなに罪を犯そうとも、どんなに不信仰でも、こんなものを見捨てず、諦めないで三十年間導いてくださった主に心から感謝します。主の再臨を待ち望みつつ、主に用いて頂きたいと願っています。

一九五一年　広島県因島生まれ
土生小学校卒　大阪女学院中・高卒　帝塚山学院大学卒
夫・正明、長女・小池久美子、次女・亜希子、
長男・勇輝



右端、由美さんのお父様（故、池田渉（わたる）さん）。
ベックさんをはさんで由美さんのお母様（池田清枝（すみえ）さん）、中央、由美さん

平由美

天国でまた会おうね

竹村　千鶴子

あなたの目は前方を見つめ、あなたのまぶたはあなたの前をまっすぐに見よ。

（箴言　4・25）



中央、千鶴子さん。右下、長男の一起さん



歩和ちゃんと



知里さんと

毎年、八月になると報道されますが、二十五年前、群馬県の御巣鷹山に日航機が墜落しました。あの日、我家の電話が鳴り、主人に機体捜索の非常呼集がかかりました。次の日になって、主人が捜索していた飛行機は御巣鷹山上空から鶴のマークが確認され、墜落した日航機が発見されました。現場の凄まじい惨状を目にした主人は、帰宅しても食事がとれませんでした。それから何日も事故現場へ通いました。

いつ、同じような事故が起きるか、それは我家にいつもある心配事でした。ときどき主人は私に言いました。「自分にもしものことがあったら子供達を頼む」それは確かに心配事ではありましたが、……いつも「今日が最後」と思うことなく、「また明日も今日と同じような日が来るのだ」と暮らしていたのです。

私は主人と若くして結婚しました。ときどきケンカしながらも楽しく過ごしていました。私はこのまま子供がいなくても二人だけの生活でもいいと思っていましたが、まわりがうるさくなってきた頃、私は卵巣のう腫の手術を受け、術後は不妊外来へ通い、結婚して七年目に第一子が与えられました。私達はこの娘に「知里」と名づけました。くりくりした目で、ものおじしない太陽みたいに明るい子、私達はこの娘にどれだけ楽しませてもらったかわかりません。知里が小学六年の秋、主人は出勤してまもなく倒れ、仕事中急死しました。心不全でした。主人はちょうど四十歳。また今日と同じような日が来る……と思って過ごしていた私でしたが、「明日も今日と同じような日が来るとは限らない」と強く心に思わされました。

あなたがたには、あすのことはわからないのです。

（ヤコブ　4・14）

主人は病院へ運ばれる前にすでに息がなかったようで、検死が済むまで長い時間待ちました。「実は死亡している」と、ついさきほど聞かされたばかり。病院へ向かうときも、私には「死」ということばが浮かびませんでした。まるで狐につままれたような感じでした。主人にさわってみるとまだ柔らかい。

……でも医師は「死んだ」と言った。……「どうしよう。どうしたらいいの」そう心のなかで叫んでいました。色々なことが頭に浮かんでは過ぎていくなかで、やがて私は「このことはイエス様からきたのだ」と気づかされました。実は私は、その数年前、二人目の子の出産を通して、受洗まで導かれました。まもなく、主人の仕事で地方勤務が続くなか、私は集会も遠ざかり、イエス様を忘れるほどになっていました。主人の突然の死はそのようなときでした。「わたし（イエス様）は決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。（ヘブル　13・5）」のみことばの約束のとおり、イエス様は私を呼んでくださいました。「そうだ。このことは主からだ！」そう気づくと同時に、私は主に祈りました。「イエス様、ごめんなさい。あなたを無視して自分の思うようにやってきました。夫にも従わず、主の秩序も乱しました。赦してください」すると本当に不思議でしたが、ひとつのみことばが頭を過ぎていきました。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。（1コリント　10・13）

「そうか、脱出の道があるのなら大丈夫なのかも知れない」と平安になったことを覚えています。けれども、昨日までと突然違う日がきて、私はこの気持ちをどこへ持っていったらよいかわかりませんでした。主人との間に締めくくりがされていないのです。つまり、「ごめんなさい」、「今までありがとう」も何も伝えていないのです。また、主人の魂の行き先に確信がもてず、しばらく苦しい日が続きました。ある日、突然、主は、「私の罪はすべてイエス様とともに十字架につけられている」とはっきり気づかせてくださいました。このときのうれしさは何ともことばでは言い表わせませんが、脱出の道はイエス様でした。イエス様は十字架によって私の債務証書を無効にしてくださいました。

わたしはあなたと永遠に契りを結ぶ。正義と公義と、恵みとあわれみをもって、契りを結ぶ。わたしは真実をもってあなたと契りを結ぶ。このとき、あなたは主を知ろう。（ホセア　2・19〜20）

わたしの叱責に心を留めるなら、今すぐ、あなたがたにわたしの霊を注ぎ、あなたがたにわたしのことばを知らせよう。（箴言　1・23）

二〇〇八年、暮れの三十一日、御代田の星空がすばらしく輝いていました。集会が終わって家に戻り、外は凍りつく寒さでしたが、もっとその星空をみようと真っ暗ななかを手探りで歩きました。これまで御代田で見たこともないほどはっきり見える星空。その空を見上げながら、私にみことばが浮かびました。

人が隠れた所に身を隠したら、わたしは彼を見ることができないのか。――主の御告げ。――天にも地にも、わたしは満ちているではないか。――主の御告げ。（エレミヤ　23・24）

その三年前に家を出てしまった娘、知里と会えない日々が続くなかで、このみことばは、本当にうれしくなりました。「そうだ。主はどこからでも見ていてくださり、知っておられるのだ」・・・まさに青天の霹靂でした。親の心配をよそに、娘は男性の元に行ってしまっていたのです。

正月のキャンプが終わって多摩の家に戻ると、その娘から年賀状が届いていました。手書きで、「年明

けに入院」とありました。ベック兄にお話ししたうえで、しばらく祈る日々が続きました。そういうなかで、私の心が次第に導かれていきました。「娘にあやまりたいことがある」と。「お父さんが死んだとき、もう自分の味方はいなくなったと思った」と、大きくなった娘から言われたことがありました。思いあたることはいっぱいありました。小さな娘の心はどんなに傷ついただろうか。年賀状が届いてから一ヶ月近くたったある日、私は病院を探して訪ねました。

娘の病気は、モヤモヤ病という難病。頭を開けての手術が予定されていましたが、脳梗塞が起きてしまい、私が訪ねたときは、手術が延期されている状態でした。久しぶりに会った娘と私は話が通じるようになっているのを確信しました。次の手術日が決まるまでの間、知里は礼拝にも出てきました。手術の当日、知里は感謝のお祈りをして、手術室へ向かいました。

けれども、長い手術が終わり、その数時間後、知里は突然、意識不明に陥りました。とんぼ返りでまた病院へ向かうなか、私に暗闇がおそってきます。反応がない知里に、私は着くまでずっと心のなかで叫んでいたみことばを娘に向けて何度も言いました。

わたしがあなたのそばを通りかかったとき、あなたが自分の血の中でもがいているのを見て、血に染まっているあなたに、「生きよ。」と言い、血に染まっているあなたに、くり返して、「生きよ。」と言った。

（エゼキエル　16・6）

すると、知里は身体を少し起こし、こちらに顔を向けて眼を開けました。知里の目を見たとき、私は、かわいそうで、かわいそうで、「もう頑張らなくてもいいよ」と思ったのです。それから五日後、知里は静かに天に召されました。よく世間ではあることですが、私は子供が自分より先に召されることなど考えたこともありませんでした。今でも、自分がどのくらい理解できているのか正直わかりません。それでも淡々と生きているのは主の守り以外ありえません。

その方は私のお任せしたものを、かの日のために守ってくださることができると確信しているからです。

（2テモテ　1・12）

わたしはいつまでも争わず、いつも怒ってはいない。わたしから出る霊と、わたしが造ったたましいが衰え果てるから。わたしは彼の道を見たが、彼をいやそう。

（イザヤ　57・16、18）

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。だからわたしは人をあなたの代わりにし、国民をあなたのいのちの代わりにするのだ。恐れるな。わたしがあなたとともにいるからだ。わたしは東から、あなたの子孫を来させ、西から、あなたを集める。わたしは、北に向かって「引き渡せ。」と言い、南に向かって「引き止めるな。」と言う。わたしの子らを遠くから来させ、わたしの娘らを地の果てから来させよ。わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った。」

（イザヤ　43・4～7）

いくつかのみことばを握って持っていました。娘の立ち返る日まで。三年待ってようやく会えたかと思ったら、四十日で召天なんか理不尽じゃないの？こんな私の思いにも、主は、ある日の福音集会での兄弟のメッセージを通して答えをくださいました。

娘は手術の前日付けの遺書を残していきました。二十六歳の若い娘が手術を前にどんな気持ちで遺書を書いたのだろうかと、勝手に想像してしまったり……。でもそのような時、「ああ、そうそう、それは

過去のこと。今は苦しみ痛みのないところで元気なのだ」と気持ちを切り換えることができ、「天国でまた会おう」と書いた娘には御国ですべてが明らかにされていることを思うと感謝です。娘が入院中にたくさん書き残していったみことばは私の喜びです。

神、その道は完全。主のみことばは純粋。主はすべて彼に身を避ける者の盾。この神こそ、私の力強いとりで。私の道を完全に探り出される。

（2サムエル　22・31、33）

だれでも、あなたの民イスラエルがおのおの自分の疫病と痛みを思い知らされて、この宮に向かって両手を差し伸べて祈るとき、どのような祈り、願いも、あなたご自身が、あなたの御住まいの所である天から聞いて、赦し、ひとりひとりに、そのすべての生き方にしたがって報いてください。あなたはその心を知っておられます。あなただけが人の子らの心を知っておられるからです。

（2歴代　6・29〜30）

あなたには、すべてができること、あなたは、どんな計画も成し遂げられることを、私は知りました。知識もなくて、摂理をおお隠した者は、だれでしょう。まことに、私は、自分で悟りえないことを告げました。自分でも知りえない不思議を。どうか聞いてください。私が申し上げます。私はあなたにお尋ねします。私にお示しください。私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。

（ヨブ　42・2〜6）

私は悩む者、貧しい者です。主よ。私を顧みてください。あなたは私の助け、私を助け出す方。わが神よ。遅れないでください。

（詩篇　40・17）

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。

（エレミヤ　29・11）

かつて、主人から「子供たちを頼む」と言われましたが、私は守ることができなかったと落ち込みました。しかし、今、目に入れても痛くないほど愛した知里が、こんなに早く天に移され、「ちーちゃん。よく来た！」と主人は喜んでいるのではないかと思ったりします。

ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょう。

（ローマ　11・33）

娘の残した小さな孫、歩和（あゆか）のことを思うと、私は祈るばかりです。

それから、弟子たちに言われた。「わたしがあなたがたを、財布も旅行袋もくつも持たせずに旅に出したとき、何か足りない物がありましたか。」彼らは言った。「いいえ。何もありませんでした。」

（ルカ　22・35）

主は私にかかわるすべてのことを、成し遂げてくださいます。主よ。あなたの恵みはとこしえにあります。

（詩篇　138・8）

竹村千鶴子（たけむら・ちづこ）
一九五四年東京都町田市生まれ。富士森高等学校、東京経済大学経済学部二部卒。長男・一起。夫・信雄一九九四年召天、長女・知里二〇〇九年召天。

福音センターでの本の保管と発送

御代田集会　長岡健次

二〇一〇年の十月に、ベックさんから「集会の本が大量に倉庫に保管されたままになっている。保管料金も莫大でとても問題です」とのお話を伺いました。以前から小諸で倉庫を借りて集会発行書籍を保管していることは聞いておりましたが、それが問題になっているとは知りませんでした。

そこで調べてみると、「光よあれ」等の本が19種類計36万冊以上も保管されており、長い間動かないままになっていることがわかりました。また保管料金は極めて高額でした。私たちは、この本をどのようにしたらいいのかと考えました。本来これらのみことばをのべ伝えるための本は、備蓄するためではなく、全国の必要としている方々の元に届けられてこそ価値があることは当然です。私たちは主に祈りました。

ベックさんは「全部センターに運んでみんなが見えるところに並べたらいいよ」と言われました。本の存在を知らなかった兄弟姉妹が、これを見て大いに利用してほしい、主をあかししてほしい、と言われたのです。そしてセンターの空きスペースを調べてみると、ぎりぎり置けそうだということがわかりました。

早速、本を福音センターに移動するためのワーキングキャンプが十一月の第二週と第四週の週末に二回開かれ、多くの兄弟姉妹が参加してくださいました。36万冊の本は重量が50トンを超え、センター内への移動と配置は容易ではありません。ワーキングキャンプ前には、「はたしてできるのだろうか?また床は大丈夫だろうか?」と思いましたが、主イエス様がすべての知恵と方法、当日の天候をもご支配してくださり、無事に運び終えることができました。

その後、クリスマスプレゼント用にと「みことばのカレンダー」の宅配サービスを開始し、今までに約500ケース、1万冊のカレンダーを発送しました。

現在センターには、以前からあった本と合わせまだ40万冊ほどの在庫があります。これらの書籍が速やかに必要とされている方々の元に届けられますようお祈りいたします。



最後に、センターに在庫しているすべての本の宅配サービスを新たに始めましたのでご案内させていただきます。本は1冊からFAX（注文フォーム参照）にてお受けいたしますが、送料は着払いとなります。大部分の本は無料ですので、是非これらの本を用いていただき、みことばをのべ伝えていただきますようお願いいたします。

集会書籍 申込書

書籍名	入数/ケース/包	注文数	書籍名	入数/ケース/包	注文数
「日々のみことば」カレンダー	20	冊	実を結ぶ命	50	冊
ドイツマガジン	50	部	神の愛 （上）	15	冊
光よあれ 第1集	15	冊	神の愛 （下）	30	冊
光よあれ 第2集	25	冊	絶えず祈れ （上）	20	冊
光よあれ 第3集	15	冊	絶えず祈れ （下）	20	冊
光よあれ 第4集	20	冊	ヨハネの黙示録 第1巻	15	冊
光よあれ 第5集	10	冊	ヨハネの黙示録 第2巻	10	冊
光よあれ 第6集	10	冊	ヨハネの黙示録 第3巻	10	冊
光よあれ 第7集	20	冊	ヨハネの黙示録 第4巻	50	冊
光よあれ 第8集	44	冊			
光よあれ 第9集	10	冊			
主は生きておられる 第1号	100	冊	パワーフォーリビング	100	冊
主は生きておられる 第2号	100	冊	日々の光 A5判 500円(有料)	100	冊
主は生きておられる 第3号	100	冊			冊

以下、大きな字ではっきりとご記入ください。

〒

住所

氏名

TEL

希望着日

（ご希望に添えない場合がありえます）

希望着時間

（着払料金の目安としては、15kgまで、センターから関東圏で約1370円、東北、関西圏で約1470円、九州圏で約1790円のようです。）

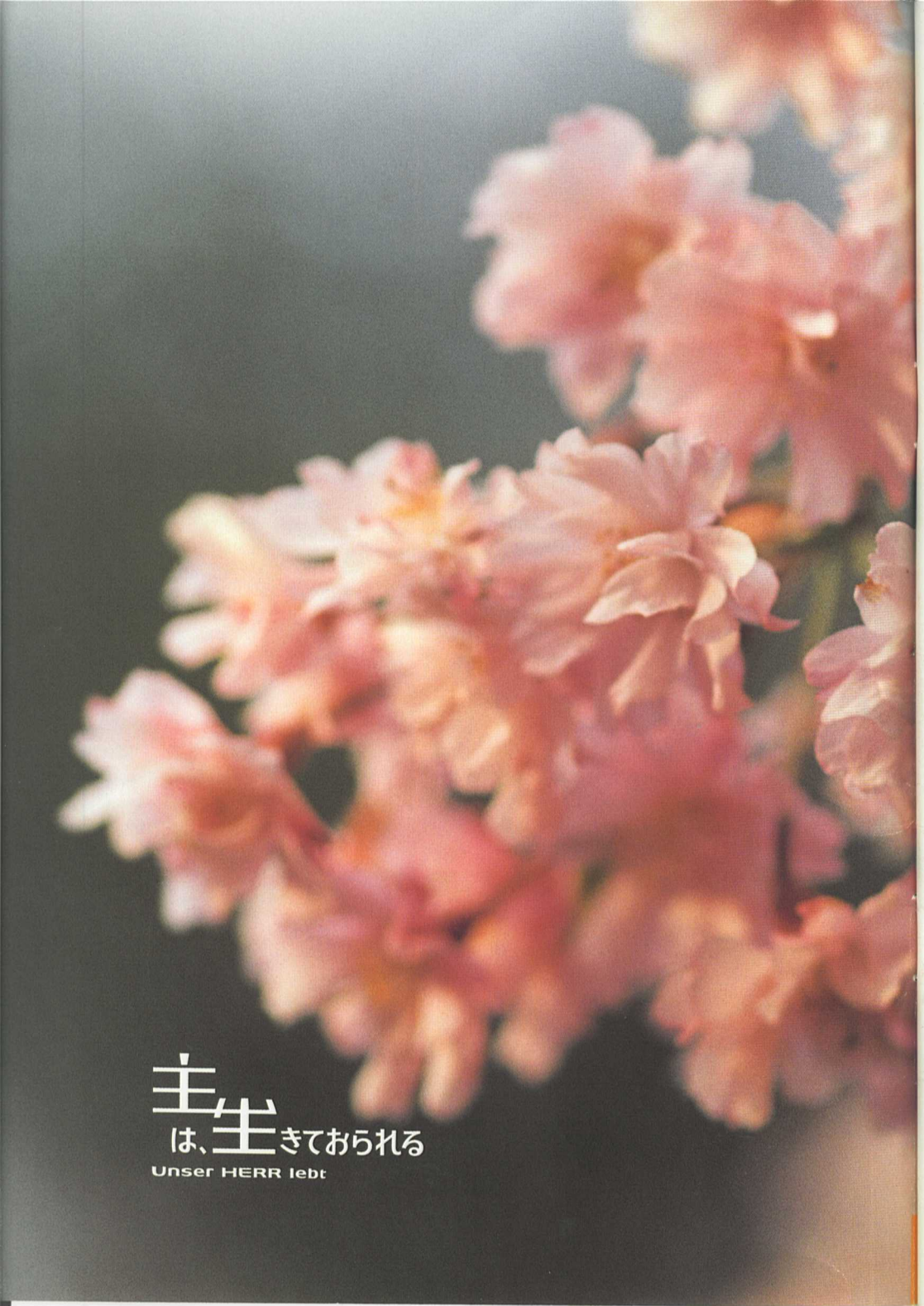
申込送付先：FAX 0267-32-6402

または、〒389-0201 北佐久郡御代田町塩野450-15

西軽井沢国際福音センター までご郵送ください。

お問合せは、御代田集会、長岡まで　TEL&FAX 026-278-8655





Unser HERR lebt
主は、生きておられる

主は生きておられる　第20号

定価100円（本体95円）　2011年3月15日初版

編集長	ゴットホルド・ベック
編集スタッフ	清水洋一　古田公人　田中順治　福留伸子　石塚稔成　石塚優子 岩本秀造　岩本範子
デザインスタッフ	石黒郁彦
写真	鈴木力　向井健二
イラスト	向井則博
題字デザイン	飯守恪太郎
印刷	新生宣教団
発行所	キリスト集会

今回も多くの方々から写真の提供をいただきました。
勝手ながらお名前は省かせて頂きます。
ご協力ありがとうございました。